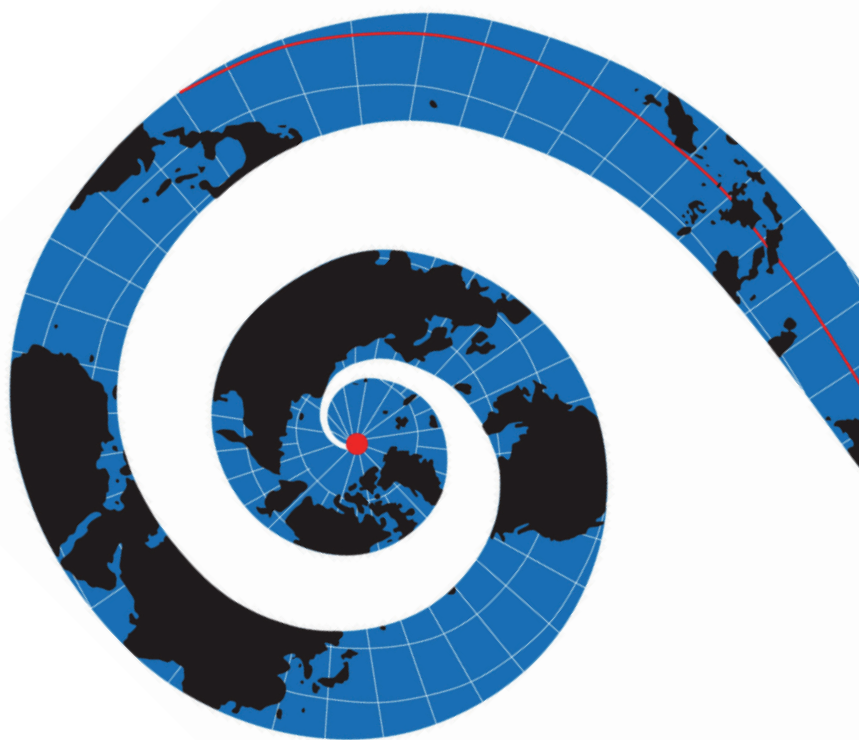


2026年度 後藤春彦研究室
第33期 卒論生募集要項



CONTENTS



1

【研究室紹介】 後藤研究室の特徴・姿勢

- ・ 2026年度卒論生募集にあたって
後藤研究室の5つの特徴
卒業論文のための5つの視座
後藤春彦の略歴
後藤研究室の実績
【重要】選考に関する注意事項
- ・ 2026年度研究室所属メンバー
- ・ 2022年度～2025年度の受賞



2

【学部4年の1年間】 卒業論文：進め方と指導体制

- ・ 学部4年生の1年間
- ・ 卒業論文の進め方
- ・ これまでの研究テーマ解説
シニア研究テーマ紹介/学生研究テーマ紹介 (M1・M2)
- ・ 過去の論文テーマ一覧



3

【修士の2年間】 修士課程の活動とプロジェクト

- ・ 修士課程の2年間
- ・ Double Degree Program
- ・ 海外ワークショップ
- ・ コンペティション
- ・ 就職状況
- ・ プロジェクト



4

【卒論生募集要項】

- ・ 卒論生募集スケジュール
- ・ 研究室入室プロセス
- ・ ホームページに関して
- ・ 質問/相談窓口 連絡先



1

【研究室紹介】

後藤研究室の特徴・姿勢

- ・ 2026年度卒論生募集にあたって
後藤研究室の5つの特徴
卒業論文のための5つの視座
後藤春彦の略歴
後藤研究室の実績
【重要】選考に関する注意事項
- ・ 2026年度研究室所属メンバー
- ・ 2022年度～2025年度の受賞

2026年度 卒論生の募集にあたって



後藤春彦

『直感』を信じろ

3年生のみなさん、研究室の選択に際して、いろいろ迷いが生じていることでしょう。毎年この時期に、私がお話しするのは「『直感』を信じろ」ということです。

これまで、200人以上の卒論生と接してきましたが、研究室の選択に悩み続けていた学生ほど、研究室所属決定後もこの選択は正しかったのか自問自答を繰り返す傾向がたつよく、結局、卒論の進捗も芳しいものとはならず、悪循環に陥りがちです。

『直感』とは、あてずっぽうの『勘』とは異なり、みなさんがこれまで生きてきた経験に基づく価値判断だと思います。時間を限って悩み、あとは自分自身の『直感』を信じて、研究室を決めることが良いと思います。

「時間」をマネジメントせよ

天才は指導する必要がないので放っておきます。

一方、秀才のみなさんに要望することは時間管理です。時間をきちんとマネジメントできる人は学術論文をまとめることも、その先の就職活動も上手にこなしていきます。「要領が良い」という表現はネガティブな意味に使われることもありますが、時間をマネジメントできる要領の良い人が、まちづくりや都市デザインの分野では求められています。

他者とコミュニケーションする上で、時間管理は信頼基盤を形成するものです。そして、今後のまちづくりや都市デザイン分野はプロセスデザインが重要で、「時間」のマネージャーの誕生を希求しています。その意味でも、早く配属希望研究室を決定する人を優遇します。

「ふたつの空間」のデザインをめざせ

ふたつの空間とは、「物理的な空間」と「社会的な空間」です。かつては、このふたつの空間は不可分なものだったと思われませんが、最近では、「社会的な空間」が希薄なものになると同時に、IT技術やモビリティの発達によって「社会的な空間」が地球規模にまで拡大しつつあり、両者が整合しなくなってきています。このことはCovid19によって明白になりました。

この乖離しつつあるふたつの空間をつなぎとめる手がかりが「景観」だと考えています。「景観設計」の講義において「景観＝風景＋地域」と、繰り返し話しましたが、言い換えるならば、景観とは「物理的な空間」と「社会的な空間」の眺めの総体です。ふたつの空間をデザインすることこそが「景観デザイン」です。

後藤研究室の5つの特徴

- 特徴1 景観を基礎とする視覚的概念と地域的概念の統合
- 特徴2 景観を基礎とする物理的空間と社会的空間の統合
- 特徴3 景観を基礎とする都市的空間と農村的空間の統合
- 特徴4 考現学的フィールドワークを重視した実践的研究
- 特徴5 まちづくりの延長における建築／公共空間の設計

卒業論文のための5つの視座

現在、後藤春彦研究室では、「集約とネットワークによる多核的な都市・地域システムへの再編」、「都市と農村のあらたな相互補完関係の構築」、「自然環境や文化遺産の持続的マネジメント」、「圏域資本（テリトリアル・キャピタル）の醸成」などの研究がすすめられています。そして、ここへ至る四半世紀の軌跡を5つの視座と呼び、「内発的景域論」、「動態的地域論」、「重層的都市論」、「社会的空間論」、「戦略的圏域論」としてシーケンシャルに配することとしました。もちろん、これら5つは独立して存在するものではなく、相互に補完関係をもち、幾重にも複層しあっています。

これら都市や地域を俯瞰する5つの視座を巡ることにしてみましょう。

1) 共発的景域論 風景と地域の統合的解釈

Keywords 生活景、文化的景観、場所の力、都市のイメージ

後藤春彦研究室を開室した際に、「景観」を大きな柱に据えました。これは、私が博士論文で「景域」を扱ったことが源になっています。それまでの景観研究は視覚的概念（可視的形象）と地域的概念（地域単元）を区分する傾向にありましたが、可視的形象を生むにいたった背景にある地域単元の風土的、歴史的、社会的文脈の解読を通して、景観の有する規範性を論じることとしました。ここでは景観の視覚的概念（可視的形象）と地域的概念（地域単元）をあわせもつものを「景域」と呼んでいます。

「景域」とは一定のまとまりある範囲として認識される地表の一部であり、固有の文化創造の基盤ともなり得るもので、生活者によって共有されてきた社会的な記憶が内在する単位地域ととらえることができます。

また、元来は生物学の用語である「内発」が、近代化が陰りを見せはじめた70年代の中頃から国内外で内発的發展として使われるようになり、わが国では早くから、比較社会学者の鶴見和子らが、グローバルスタンダード化がすすむ近代化の対極に位置づけた地域固有の發展の理論として「内発」を提唱しました。「共発」とは、「内発」と「外発」のハイブリッドによるものです。

「共発的景域論」とは可視的な風景とそれを生み出している、あるいは、下支えしている地域を表裏一体の「景域」として統合的に解釈することを前提としています。特に、都市のイメージを要素分解して把握するのではなく、場所の履歴やその記憶、リアルな生活の実態が表出するいくつもの「生活景」の集積として把握することにより、「ふつうのまち」をいくつもの「個性あるまち」へと導くものです。

2) 動態的地域論 地域遺伝子の発見と実践的行動

Keywords 集落、地方都市、地域遺伝子、共発的發展、定住自立圏

一方で、後藤春彦研究室では、今和次郎研究室、吉阪隆正研究室を貫く一連の農村計画の流れの継承もここみてきました。しかし、民家研究やデザインサーベイといった即物的な調査研究ではなく、地方都市や農山漁村における地方自治や地域経営に主眼を置いています。特に、これまでに自治体の総合計画や都市マスタープランの策定を数多く担当したことが大きな糧となっています。

風土と呼ばれるような生態的特徴に適合した農山漁村集落は、その永い営みの中で脈々と培った「地域遺伝子」と呼ばれる社会的な記憶を有しています。そうした「地域遺伝子」を発見することが農山漁村研究の鍵となると思います。「テトラモデル」と名付けたダイアグラムで「地域遺伝子」の体系を示すとともに、「まちづくりオーラルヒストリー調査」や「まちづくり人生ゲーム」などの独自の手法を用いて「地域遺伝子」を発見することに取り組んできました。

その中でも、特に、山梨県早川町では、地域に密着した研究企画をすすめるローカル・シンクタンクとして「日本上流文化圏研究所」を設立しました。また、同様に、神奈川県小田原市では、自治体シンクタンクとして「政策総合研究所」を設立しました。

「動態的地域論」とは、地方における新しい自治の仕組みを模索する手がかりとなり、コミュニティ自治による地域経営を導くものです。

3) 重層的都市論 遷移する都市の再定義と記述

Keywords 高流動性社会、シュリンキングシティ、イミグレーションタウン

つぎに、興味を示したのは人間集団、すなわち、コミュニティのふるまいです。ここからは、前のふたつの「内発的景域論」と「動態的地域論」よりも踏み込んで「無形」の世界へと軸足を移していくことになりました。

ニューカッスル大学名誉教授で都市計画理論の権威であるパッツィ・ヒーリーの「都市」の再定義を引用してみましょう。

『都市とは物理的な対象ではなく、「うごめく大衆」の絡み合うような動きにおける、流れるような拘束されることのない結合体である』

このように、活動する人間（集団）そのものによって都市は成り立っているとの基本的理解に立脚して、「混合と分散」、「凝縮と拡散」、「移動と滞留」を繰り返す人びとの流動に着目して、それを考現学的に記述することをここみてきました。今和次郎が「有形」の要素を採集し、スケッチブックに描き止めたのに対して、私は輻輳する人びとの動きが幾重にも重なり積層したものとして都市を把握し、そうした都市の遷移を記述することにつとめました。

そこで見えてきた都市のダイナミズムを生む背景に、用途の混在や人種や宗教・国籍を超えた人間の混在があることを発見し、『柔軟で拘束されることのない結びつき』としての混在を肯定的に捉えました。

「重層的都市論」とは、近代都市計画が「分ける」ことを前提に合理的な課題の解決をめざしたのに対して、「分かち合う」ことをめざす方法論の反転を導くものです。

4) 社会的空間論 人間と社会をむすぶ相互補完関係の創造

Keywords 社会関係資本、コミュニティ自治、エリアマネジメント

さらに、都市や地域の新たなプレイヤーに着目し、それらのネットワークによるガバナンスの構築も重要なデザインの対象とみなすこととしました。

すなわち、市民と市場をむすび、信頼・規範・ネットワークによって成立する社会関係資本こそが市民の QOL の向上を約束するものです。社会関係資本を高度化したコミュニティ自治による地域経営は、コモンズをはじめとするテリトリアル・キャピタルの醸成に寄与するものとして期待されています。

たとえば前近代のわが国でも、地域の旦那衆が身銭を切って地域経営をしてきた歴史があります。今日においても、防災と医療・福祉・健康分野は人と社会をむすぶ相互補完関係が基礎となっています。特に、後藤春彦研究室では、奈良県立医科大学と協働で、奈良県橿原市において医学を基礎とするまちづくり（Medicine -Based Town ）を展開しています。これは、まちなか医療の展開のみならず、生活習慣病を誘発する未病を都市空間が治すことをめざすもので、高騰する医療費の削減に対する都市の寄与が期待されています。

また、商店街や大学まちなどの既成の社会的空間を積極的に評価活用するとともに、企業の地域経営への参加を促すことになるでしょう。

「社会的空間論」とは、さまざまな主体の相互補完関係によりうまれるネットワークや規範を地域資本と呼べるところまで高めていくことを導くものです。

5) 戦略的圏域論 都市と地域の再編的連携

Keywords スペーシャルプランニング、シティリージョン、ナレッジシティ

一方、欧州の計画システムを研究しはじめてから、土地利用のように機能で空間を分割するのではなく、社会的関係性にもとづいて社会的空間を戦略的に統合して新たな計画的圏域を形成する必要性を唱えるようになりました。

特にドイツの「大都市圏」と呼ばれる「シティリージョン」は都市や地域の実情に応じて自由に構成され、州を超えるもの、飛び地になるもの、複数の「大都市圏」に参画するもの、多種多様です。こうした「シティリージョン」では、政治的意思決定組織が法のもとに置かれるとともに、民間の力も発揮して地域開発を実行する有限責任会社がつくられるなど、国際競争力のある圏域が戦略的に形成されています。さらに、デンマークとスエーデンの国境を越えて形成される「メディコン・バレイ」と呼ばれる医療・バイオ系クラスタ圏域も戦略的に構築されて、全世界から投資を募っています。

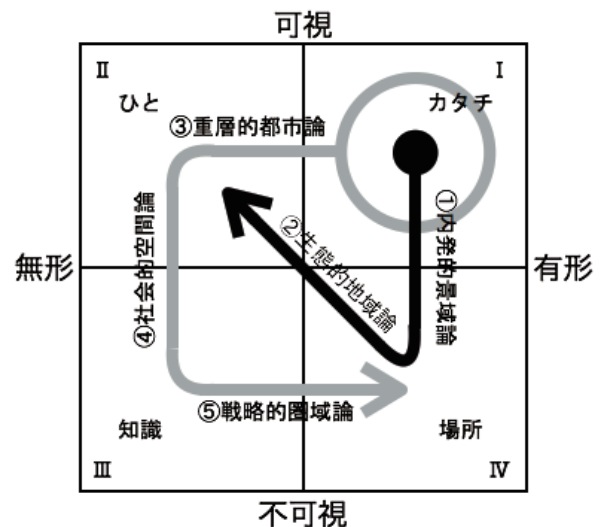
基礎自治体の枠組みをこえて戦略的な計画圏域として、いくつかの中心都市と周辺地域からなる「シティリージョン」を構築し、ナレッジによって創造的に圏域を牽引する戦略を描くことが必要です。

「戦略的圏域論」とは、自立生活圏などの計画的な圏域とその階層を設定し、「集約とネットワーク」によって圏域構造を再編すると同時に、圏域の意思決定組織や事業会社などの柔軟な組織や仕組みをつくることを導くものです。

5つの「視座」を動かす

これまで研究室で行ってきた研究の変遷を5つの視座をめぐるかたちでトレースしてきました。これまでの「有形」から「無形」への思考の推移を振り返ると、「視座」の動きの軌跡、すなわち、思考の変遷には大きくふたつのルートがあったように思われます。

「無形」「有形」を横軸、「可視」「不可視」を縦軸とするマトリックスで示すならば、ひとつは、視座は「有形」の第一象限を飛び立ち、第四象限の「場所」を経て、第二象限の「ひと」へいたるルートとなります。同様に、もうひとつは、「有形」の第一象限を飛び立ち、第二・第三象限の「ひと」や「知識」からなる「社会的空間」を経て第四象限の「場所」へいたるルートです。



第一のルートは、「内発的發展論」から「動態的地域論」にいたる思考の過程です。これは、研究室の開設以前から思考していた動きの延長だと思います。特に振り返れば、後藤が博士論文で取り上げた「景域」という概念、さらに遡って、修論で取り上げた「景観方位」、そして卒論で取り上げた「地景名称（空間言語）」が、第一象限から第二象限への移動を示しています。

一方、第二のルートは、研究室の開設以後、自治体からの委託研究などを通じて学んだより実践的な発想による動きで、デザインという側面に加えてマネジメントという側面が強く働いているように伺える「重層的都市論」から「社会的空間論」を経て「戦略的圏域論」にいたる思考の過程です。

こうした時計周りの第一ルートと、反時計回りの第二ルートの存在は、時間差をもちながらも、お互い呼応しながら動いてきたように思われます。

建築学を背景に都市や地域について考える

先に示した5つの視座は、みなさんが卒論に取りかかるための5つのゲートウェイであると同時に、みなさんが孫悟空のように筋斗雲によって縦横無尽にかけめぐって、迷子になりそうになっても、つねに下支えしてくれているお釈迦様の五本の指のような存在でもあります。研究が行き詰まっても、必ず、どこかの指にひっかかって、ひょいと拾い上げてくれるに違いないセーフティネットのようなものです。

ぜひ、後藤研究室で、「物理的な空間」と「社会的な空間」をデザインする醍醐味を味わってみてください。それができるのは、建築学を背景に都市や地域を学んだみなさんの特権です。一生をかけて追求したい目標を見いだすこともできることでしょう。

2025.1.23

H.GOTO

後藤春彦の略歴

都市計画、景観・地域デザイン

1957 年生まれ。1980 年早稲田大学理工学部建築学科卒業、87 年早稲田大学大学院博士後期課程修了・工学博士。90 年三重大学工学部建築学科助教授、94 年早稲田大学理工学部助教授をへて、98 年より早稲田大学理工学部教授（現職）。

2018 年早稲田大学理事、21 年常任理事を経て、22 年より副総長（現職）。

早稲田大学創造理工学部長、日本都市計画学会会長、日本生活学会会長、日本建築学会副会長、世界居住学会副会長ほか歴任。

現在、早稲田大学総合研究機構・医学を基礎とするまちづくり研究所・所長。内閣府地域分権改革有識者会議・議員。日本工学会フェロー。

著書に、『無形学へ』（水曜社）、『景観まちづくり論』（学芸出版社）、『生活景』（学芸出版社）、『まちづくりオーラル・ヒストリー』（水曜社）、『図説 都市デザインの進め方』（丸善）、『医学を基礎とするまちづくり』（水曜社）ほか多数。

訳書に『場所の力』（学芸出版社）、『メイキング・ベター・プレイス』（鹿島出版会）。

2005 年日本建築学会賞（論文）、2010 年グッドデザイン賞、2010 年土地活用モデル大賞・国土交通大臣賞、2011 年日本都市計画学会賞（計画設計賞）ほか受賞。

後藤春彦研究室の(1994年~2025年)

査読論文	200 編
（日本建築学会計画系論文報告集	109編）
（日本建築学会技術報告集	11編）
（日本建築学会作品選集	1編）
（Japan Architectural Review	2編）
（日本都市計画学会学術研究論文集	77編）
外部研究費	9 億 4230 万円
（委託研究費総額	5 億 2380 万円）
（研究助成費総額	4 億 1850 万円）

【重要】個人面談（対面）および卒論生の選考に関する注意事項

1 月 22 日（木）10:00~12:00 に、「都市計画系合同説明会」（55 号館 N 棟 1F 第 2 会議室）が開催されます。

また、研究室オープンルーム期間中の以下の日時において、

1 月 22 日（木）12:30-15:00
1 月 27 日（火）16:30-18:00
1 月 28 日（水）10:30-15:00
1 月 29 日（木）10:30-15:00

後藤による対面の個人面談（ひとりあたり 15 分）に応じます。

希望者は、hgoto@waseda.jp へ、事前に面談時間を予約すること。

また、2 月 7 日（土）午後に最終選考面接を行います（こちらも要予約）。

研究室 HP（<http://www.goto.arch.waseda.ac.jp/>）にて卒論生募集に関する情報を提供しています。

2026年度 研究室所属メンバー



教授	後藤 春彦/工学博士			
上級研究員	岡村 竹史/修士(建築学)			
次席研究員	林 廷玟/博士(工学)		林 書嫻/修士(工学/建築学)	
助手(建築学科)	泉川 時/修士(建築学)			
M3	櫻井 友紀子			
M2	青木 紳 佐野 翔哉 益田 暖大	石山 結貴 中内 晶太 松島 汐音	海老澤 理々華 永田 一真 森 映介	長田 祐毅 中谷 紗季 横山 魁度
M1	朝倉 健人 小林 千香子 藤原 静乃	赤松 陽華 佐藤 未来乃 松村 爽冴	越智 翔一郎 卓 由眞	菊池 和成 早川 滯
他大学教員	Aya Ibrahim Mohamed (Alexandria University) 佐久間 康富 (和歌山大) 佐藤 宏亮 (芝浦工業大) 高嶺 翔太 (追手門学院大) 田口 太郎 (徳島大) 野田 満 (近畿大) 三宅 諭 (三重大) 森田 椋也 (徳島大) 山崎 義人 (東洋大) 山村 崇 (東京都立大) 吉江 俊 (東京大)			

2022年度~2025年度の受賞

後藤研では、卒業論文・卒業設計・修士論文をはじめとして、コンペや学会発表等にも積極的に取り組んおり、豊富な受賞歴があります。

森田彩香

2022 年日本建築学会優秀卒業論文賞

「クラフト的ものづくり産業」を下支えする《創造的産業空間》に関する研究
—台東区南部エリアにおける新規参入経営者の経営資源獲得プロセスに着目して—

村井遥

2023年(第34回)日本建築学会優秀修士論文賞

「漁村集落における構築物の設置と道具の移動による浜の再構築プロセス
—福井県三方上中郡若狭町常神集落を対象として—」

糸賀大介・石川航士朗(古谷研)・大竹大雅(高口研)

せんだいデザインリーグ 卒業設計日本一決定戦2023 特別賞 全国4位

IEAGD 大学建築卒業設計国際展覧会(台湾開催) 日本推薦作品 選出・出展

「生活景の結い -都電荒川線を主軸とした带状生活圈-」

味方唯・池上恵美・糸賀大介・各務弓太・鈴木孝之

2023年度日本造園学会全国大会学生公開デザインコンペ 佳作 全国10 選

「連関する恵み -江田川を中心とする生活と観光-」

糸賀大介

2023年度日本建築学会大会(近畿) 学術講演会 都市計画部門 若手優秀発表賞

「場所を介した「わたしごと」の拡張とその形成過程」

澤村果那子・福本翔太(古谷・田中研)・田中幹久(山田研)

せんだいデザインリーグ 卒業設計日本一決定戦2024 100選

「材とまちのこれから -まちの材料開発者と紡ぐ公共施設「技術館」の提案-」

岡本晴佳・大橋碧(古谷・田中研)・内山祐樹(田辺研)

全国合同卒業設計展「卒、24」 10選

せんだいデザインリーグ 卒業設計日本一決定戦2024 13位

赤れんが卒業設計展2024 100選

「向こう十軒両隣」

松島汐音・岩田紗依(小林研)・振木歩(早部研)・松島英里(古谷・田中研)・三輪結菜(古谷・田中研)

2024年(第11回)大東建託賃貸住宅コンペ アイデア提案部門

「震災復興のラストランナー 福島県双葉町」 優秀賞

「超拡張暮らし」

鶴井唯人 **2024年度 日本建築学会大会都市計画部門 若手優秀発表賞**
「滞留行動の動態からみる温泉観光地の受容性に関する研究
-群馬県草津温泉での22 の外湯をめぐる「湯周り空間」の分析から -」

横山魁度・柴田達之助(吉村研)
第18回 長谷工 住まいのデザインコンペティション 佳作
「【営みのあられしろ】による個人の生の最大化」

各務弓太・加賀谷唯・林泰地・海老澤理々華・永田一真・松島汐音・泉川時
トウキョウ建築コレクション2025【プロジェクト展】 須部恭浩賞
「NEW UJIKO STYLE -縮退社会における神社を中心にした地域再編計画-」

森田彩香 **トウキョウ建築コレクション2025【全国修士論文展】 加藤耕一 賞**
「縮退期における地場産業の機能を補完する産業空間に関する研究
-福井県越前鯖江地域、製造業者の持ち場意識に着目して-」

中谷紗季 **2025年(第36回)日本建築学会優秀卒業論文賞**
「韓国の住居文化の振興政策における新規韓屋村の真正性の獲得体系
-支援制度を拡充する行政機関と恩平韓屋村の住民との相互作用に着目して -」

中谷紗季・岩田紗依(小林研)・林賜紀(高口研)
**せんだいデザインリーグ2025 卒業設計日本一決定戦 100選
卒、25 50選**
「SHINJUKU ENERGY STEM -新宿西口換気塔増築計画-」

石山結貴・長田祐毅・中谷紗季
第19回 長谷工 住まいのデザインコンペティション 佳作
「染めな染み -生業がつなぐ家族のかたち-」



2

【学部4年の1年間】 卒業論文：進め方と指導体制

- ・学部4年生の1年間
- ・卒業論文の進め方
- ・これまでの研究テーマ解説
シニア研究テーマ紹介/学生研究テーマ紹介（M1・M2）
- ・過去の論文テーマ一覧

学部4年生の一年間

学部4年生は、主に設計演習F、卒業論文、卒業計画に取り組みます。卒業論文の指導を先生だけでなく、博士や修士の学生混合で構成する「ゼミ」に所属して論文を進めることが、後藤研究室の特徴です。

学部4年次の主な取組み

設計演習 F

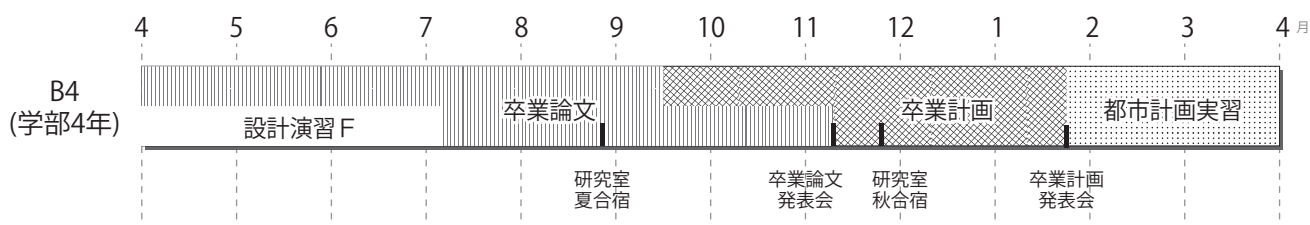
実際のフィールドワークや関連する講義をととして都市・地域デザインの方法を学習する授業

卒業論文

ゼミに所属し、ゼミメンバーと話し合いながら進めていく科目

卒業計画

設計製図の最終年度科目にあたり、異分野3名のグループで取り組む科目



設計演習 F ってどんな授業？

設計演習Fは4年生になり都市・地域計画の専門教育の入り口となる授業です。この授業の最大の特徴は、特定の地域を対象として学生と教員が現地で合宿を行い、実際にフィールドに入りこみ、地域の問題を発見していくことにあります。



▲現地最終発表



▲学内最終発表

【事前調査】

地図・文献等の資料から事前に地域に対する知識を得、興味関心や問題意識を整理します。また、実際にフィールドに入り、自らの足で敷地調査や地元の人へのヒアリング調査を行います。



▲現地調査(三島市)



▲合宿発表

【合宿】

事前調査で得た情報から分析を行い、教員と学生が泊まり込みで議論を重ね、提案を固めていきます。最終日には地元の人に向けて現地中間発表を行い、ご意見を頂きます。

【発表】

学内と現地で最終発表を行います。現地では大勢の地元の方に対してプレゼンテーションを行い、貴重な生の意見を頂きます。



▲中間発表

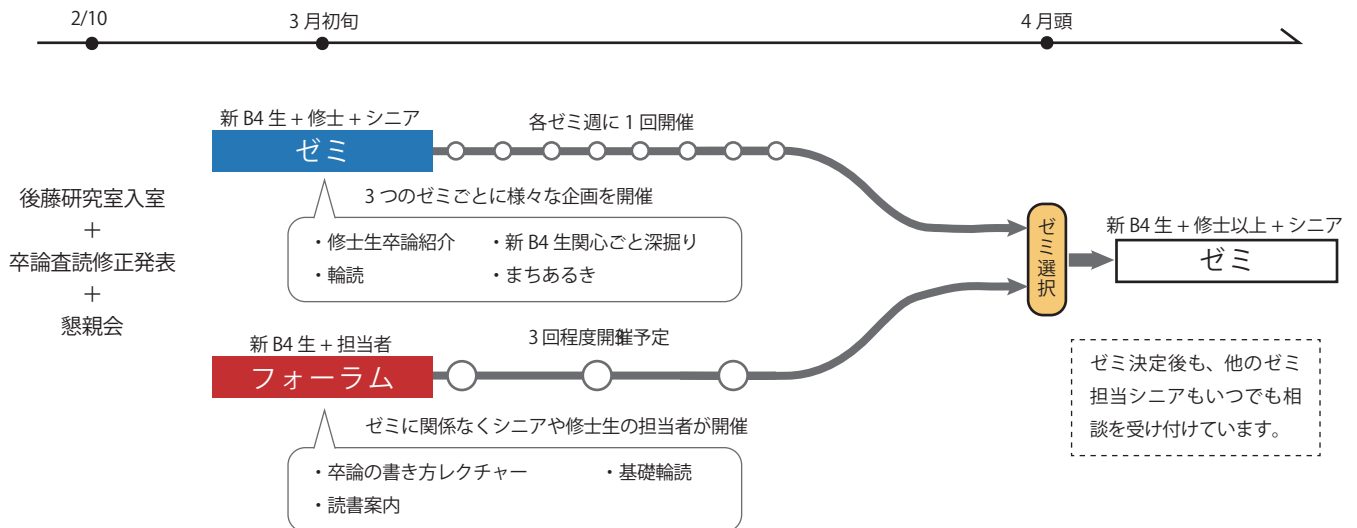


▲合宿作業

卒業論文の進め方

昨年度は、新 B4 生のゼミ配属の最終決定を 4 月頭とし、3 月初旬より卒論指導が始まりました。

入室直後は、研究室全体のことは勿論、論文のカギとなる自身の「興味関心事」や「問題意識」についてもわからないことの方が多いと思います。そこで、後藤研究室では、新 B4 生に研究室の雰囲気や指導体制を理解してもらうため、また、共に研究を進めるシニアや修士の学生との交流の場として、下記のようなプログラムを予定しています（下記は昨年度のものになりますので、変更の可能性があります）。



後藤研入室日

後藤研究室入室 + 卒論査読修正発表 + 懇親会

趣旨：

・後藤研入室日には例年、卒論査読修正発表と懇親会を行っています。卒論査読修正発表では修士 1 年が昨年執筆した卒業論文を再度発表します。論文には自身の興味関心等からテーマに広がりをもたせる時間と、緻密な論理を組み立てていき先鋭化させる両極の作業が必要です。この発表では査読修正に向けて論文をどのように精緻化していくか後藤先生やシニアと学生が高度な議論を進めていく様を見てもらいます。※査読修正：論文は執筆して終わりではなく、学術雑誌等に投稿して社会に広く伝えることが推奨されます。この投稿された論文を専門家が読んで適切な内容か判断することを「査読」と言います。後藤研では日本建築学会や日本都市計画学会の論文集に投稿するために卒業論文を修正することを査読修正と呼んでいます。

ゼミ

「ゼミ」は、卒論執筆やその他の活動の拠り所となる、学年混合・少人数の演習ゼミです。新 B4 生は 4 月頭を目処にゼミへの配属確認を行う予定です。それに先立ち、ゼミの雰囲気を知ってもらうためにも、各ゼミで行われるレクチャーや輪読、まちあるきなどに積極的に参加していただくことを推奨します。

目的：

- ・シニアや修士生との議論を通して、自身の興味関心事などを深掘していく。
- ・全シニアから直接指導を受ける機会を設けることで、シニアの雰囲気や指導方針、研究テーマの理解を深める。

体制：

- ・シニアと修士生からなる 3 つの「ゼミ」にて
- ・1 回のゼミで複数スタジオを展開。卒論生は 3~4 名ずつ各スタジオを巡る。

フォーラム

「フォーラム」は、後藤研究室全体で行われるフォーラムで、3~6 月の期間中に 3 回程度実施予定です。同期はもちろん、先輩やシニアの方々と話す場として機能します。また、今後研究を進めていく上で、ゼミを跨いで色々な意見や考えのヒントをもらえる場としても機能し、研究しやすい環境を築いていきます。

目的：

- ・シニアや修士生と新 B4 生の交流
- ・卒論の書きはじめ時期に持っている狭い視野を拡げて、問題関心を深める
- ・後藤研全体として、ゼミ間の垣根を超えて研究しやすい環境をつくる

体制：

- ・新 B4 生は原則参加とし、修士・シニア含めた研究室全体で開催（卒論の書き方レクチャー・読書案内・基礎輪読 等）

次頁 ゼミの特徴と研究テーマについて詳しく

後藤研究室の3つのゼミ

前述のように後藤研究室では3つのゼミによって論文指導が行われています。卒業論文は個々人の興味関心に合わせて考えていくため、テーマに制限はありません。ゼミでも一つに定められた対象や方法がある訳ではなく、卒論生と共に自由にテーマ設定をしていきます。ここではゼミの雰囲気伝えるため、敢えてそれぞれのゼミのシニアや学生のこれまでの蓄積からその特徴を記しました。

実際にゼミに参加し、シニアや学生と話しながら自身に合うゼミを探してみてください。

1		2		3	
項目		(旧)空間言論ゼミ		共域ゼミ	
				時の環境ゼミ	
シニア	林 書嫻	林 廷玟	泉川 時		
主な対象地域	大都市	都市部（都心～郊外） 地方部	地方地域		
方法 / アプローチ	ポストモダン都市論 現象学的アプローチ（場所論）	フィールドワーク 俯瞰的調査・統計分析等	発見的方法 フィールドワーク		
関心分野	都市論・都市デザイン論	場所…文化継承、環境認知、 健康格差等に着眼して	地域計画、神社・宗教学 民俗学・環境美学		
ゼミの文化・進め方	「論文を完成させる」「卒業する」というのではなく、「自分が学生時代に全力で挑むテーマを見つける（学部卒業論文）」「世界で一番自分が詳しい研究分野を拓く（修士論文）」ということを目指します。ゼミには変わった研究をしている癖の強い先輩が沢山いますが、専門や考え方の違うメンバーでたくさん「議論する」というのがゼミの原動力です。	もともと異なるゼミに参加していたシニアが合流して新たにできた比較的新しいゼミです。そのため幅広い関心やノウハウを持つメンバーが参加しています。 コミュニティ醸成の実践を対象とした、小さなスケールの詳細な調査から、地域への波及、さらには地理的分布の可視化など、広域なスケールでの調査まで実施しています。	「地域に入る」ことを大事にしています。これは東京の中心部であってもその地域・その場所らしさを探すことに変わりありません。自然環境や歴史的背景を紐解きながら、それぞれの地域がなぜ成立しているのか、存立構造を考える視点と、個人が主観的に構築する環世界から地域の世界観を発見していく視点を大事にしています。		
メッセージ	マイルドヤンキーの地元観、家族以外の人と同居する人びと、記憶に残っている街角、自分で説明できない記憶、なぜ撮ったか忘れてしまった写真…。そんなものを研究してどうするのか、と言われるものから、本質的な議論をしましょう。これらは全て、社会の本質をえぐる論文になっています。鋭い観察眼で「都市の新しい見方」を提示し、革新的なアイデアを生み出す集団を目指しています。	卒論は、皆さんがこれまで育んできた関心を言語化し、発信していく貴重な機会です。分かりやすく説得的で、かつ皆さんの関心に基づいた新鮮・画期的なメッセージの発信が重要です。 多くの人にとっては慣れないことですが、ゼミでの議論と卒論を通して上手くなります。皆さんと、魅力的なメッセージを作り上げることを楽しみにしています。	地域の「世界観」を理解し、自身の「問い」を育てることを大事にしています。人から話を聞いたり地域を歩くことから始めたい。土地の歴史や記憶・風土からまちづくりを考えたい。地域の生業や暮らしの成り立ちを景観や空間から読み解きたい。そんな人にオススメです。ゼミでは一緒に悩みながら、見てきたこと・考えていることを言語化する手伝いができると思います。		

(旧) 空間言論ゼミ

都市を形づくる不可視の社会空間に、様々な人文知を使って迫る

keywords: 都市論、多様性、都市計画史、包摂、場所性、オーラルヒストリー、リミナリティ、経験の空間



ゼミ活動の紹介

1. 分野にとらわれず、「都市」から哲学を導く

渋谷・丸の内・麻布台などの大型再開発の激化、大阪万博などとともに、「都市」に注目が集まっています。TOYOTAの「Woven City」をはじめ、民間企業も「都市をつくる」ことの魅力に気づき始めました。いま、あらゆる人びとが「都市」に関心を持ち、もはや都市の研究やデザインは「都市計画」の専門家だけのものではありません。

みなさんには、これまで学んできた建築単体のデザインだけでなく、より広範な社会に対する提案が求められます。空間言論ゼミでは、社会学・地理学・哲学・民俗学・人類学など、様々な分野を超えて議論し、「都市の観察」から新しい時代の哲学やデザインの知恵を導くことを目指します。

2. 目に見えないもの・感覚的なものをつかみだす科学

人文知を駆使するということと同時に「科学的アプローチ」も重視します。空間言論ゼミは、目に見えない事象や感覚的な事象を科学的に分析するよう試みてきました。人びとが生きて感じる都市像を幽霊のように地図に可視化する「経験の地理学」、世代交代とともに変化する地域像を「伝承」の行為から描写するもの、東京の再開発の歴史を俯瞰してそれらに込められた「未来のイメージ」に迫るものなど、ユニークな方法が試みられてきました。

3. 「図の知性」を通して思考を可視化する

「人文知」「科学的アプローチ」に次いで、3つ目に重要なのは「伝えるデザイン」です。複雑なものごとをどうやって可視化していくか、この部分は人文研究が拓けなかった新たな挑戦で、デザインを専門とする私たちの出番です。ともに模索していきましょう。

4. 論文執筆だけでなく、様々な活動

「あなたの論文のテーマは？」と聞かれても、はじめは難しいでしょう。ゼミでは、いきなり論文を書き始めるのではなく、先輩・後輩と一緒に様々な活動を行い、テーマをともに発見していきます。

①輪読…一緒に本を読み、ディスカッションをします。おそらくこれまで経験したことない迫力です。ぜひ参加を。

②まちあるき…実際の都市の現場を回り、いろんなものを見てからその場で議論し、発見や気づきを共有します。

③夜会…部屋を暗くして各々興味のあるものを持ち寄り、話し合います。面白い話をした人には景品あり。

④小旅行…東京から抜け出して、地方都市を見て回り、関心を広げます。2021年は名古屋、22年は尾道～倉敷、23年は京都。

⑤合宿…卒業論文を仕上げるときは集中して合宿をします。

★詳しいことは「空間言論ゼミ」で検索！

メンバー(2025年度)

【シニア】林 書嫻

【M2】上原 祐輝、白鳥 雄星、鶴井 唯人、西村 味佳

【M1】青木 紳、海老澤 理々華、長田 祐毅、永田 一真

【B4】朝倉 健人、菊池 和成、藤原 静乃、松村 爽芽

■2025年度ゼミ長、長田くんからひとこと！■

空間言論ゼミは、都市や建築をめぐる問いを出発点に、各自の関心や経験を持ち寄って徹底的に議論するゼミです！メンバーは皆個性派ですが、互いを尊重し違いを楽しむ文化があります。活発な対話を通じて思考を鍛え、自分の個性を伸ばしたい人にぴったりです。学生もシニアも仲が良く、話しやすい環境が整っています。一緒に議論できるのを楽しみにしています！

共域ゼミ

暮らし・実践の現場から学び、都市・地域像の熟議に活かす

keywords: 場所、文化、環境認知、公共空間、住宅地再生、アートプロジェクト、居場所、健康格差



上の写真はゼミの諸先輩方が調査をした地域の現場の一例です。

ゼミ活動の紹介

■空間に宿る多層的で複雑な意味を考える視点―「共域」

今日我が国が抱える様々な課題に対して、建築・都市計画を学ぶ僕たちに何ができるのでしょうか。このことに対して、共域ゼミのメンバーは、幅広い関心を持っています。しかし大まかには「共域」と呼びうるような考え方を共有しています。

私たちの暮らす都市・地域は、多様な意味を帯びています。ある場所がある人にとってはとても大事な場所であり、またある人にとっては邪魔な場所であることがあります。このような意味は、時に特定の人々や生き物を知らず知らずのうちに虐げることもあります。

建築・都市計画を学んできた私たちは、このような場所が帯びる意味を機敏に感じ取ることが出来ます。よって私達には、感じ取った意味を可視化し、熟議に用いて、計画に取り入れることが期待されています。これを実行するためには、人々がどういった「範域の空間」に対して意味を「共有」しているのかを正確に理解し、その意味同士の関連を分析することが肝要です。この考え方を現す標語が「共域」です。

■不安定化する時代―共域的考え方の重要性は増す

相次ぐ災害や経済衰退を背景に、現代社会は間違いなく不安定化し「焼け跡の時代」とも呼ばれています。しかし一方

では、すでに有るものを生かし、上手く組み替えて、魅力的な意味を宿す場所づくりが、焼け跡に「バラック」を建ててゆくように、そこかしこで生まれています。それを可能とするのは、その場や地域の可能性を共有する集団です。共域的考え方は、このような場所・地域の現代的創造の要点を学ぶことを可能にします。

■現場から学び、都市・地域像の熟議へ―卒論の流れ

共域的考え方は、様々な調査対象に応用可能です。よって卒論の執筆は、ゼミや研究室が特定のテーマを事前に設定するのではなく、個々の関心からスタートします。議論を重ね、対象地・テーマを徐々に絞り込み、多くの場合では実際の都市・地域にてフィールドワークを行います。そこで出会った様々な人々との交流や、空間の記録を基に、論文を通じて伝えたいメッセージの内容と、その適切な構築方法を定めていきます。その意味で論文は、都市・地域の人々に学びながら進めていきます。

こうしたプロセスを経て、分かりやすく説得的で、かつ皆さんの関心に基づいた新鮮・画期的なメッセージの構築を目指します。上手く発信できれば、メッセージは都市・地域の将来像の熟議に活かされ、執筆者らしい方法で都市・地域をより良くすることに繋がります。

メンバー(2025年度)

【シニア】林 廷玖

【M3】加賀谷 唯

【M2】大友 裕也、櫻井 友紀子、山岸 颯汰

【M1】石山 結貴、佐野 翔哉、松島 汐音、森 映介

【B4】岡本 峻太郎、小林 千香子、佐藤 未来乃、

卓 由真

■2025年度ゼミ長、佐野くんからひとこと！■

共域ゼミの魅力は、自由闊達かつ本気の「議論」にあります。率直に考えを投げ合う活発な議論の中で、都市を多角的に捉える視点が自然と身につきます。また、議論を通して小さな関心を論文という形にまで昇華できる点も、共域ゼミの大きな強みです。議論に本気で向き合う分だけ、確かな成長の手応えを得られる環境がここにはあります。共域ゼミでお待ちしております！

時の環境ゼミ

地域の「世界観」を理解し、自身の「問い」を育てる

keywords: 発見的方法、地方・地域、主体、継承、神社、生業、農山漁村、環世界、移動・流動



上の写真はゼミの諸先輩方が調査をした地域の現場の一例です。

ゼミ活動の紹介

現在の社会は流動化が進み、人びとの広範な移動が頻繁になり、それに合わせてどこにいても同じような暮らしがしやすいような生活様式の均質化が起き、もはや「都市と農村」の線引きも曖昧になっています。さらに地方・地域では人口減少や高齢化が進み、その地域・その場所固有の暮らしや生業が形として見えにくくなっているのが現状です。

こうした社会背景を受け、ゼミではまず、地域の「世界観」を理解し、研究や計画に臨むことを大事にしています。

吉阪隆正の系譜で大事な考え方の一つに「発見的方法」があります。これは漁村研究の第一人者である地井昭夫が1965年の伊豆大島の大火災から元町復興計画のための調査をしていた際に導き出した考えです。地域に蓄積された知恵や資源をフィールドワークから発見すべきだというのですが、地井昭夫は「発見的方法とはくいまだ隠された世界>を見出し、くいまだ在らざる世界>を探るきわめて人間的な認識と方法のひとつの体系である」としています。つまり有形のものだけでなく、地域に入ってそこに住まう人びとの思考法自体を発見することが大事だと言えます。

このように地域に入りその世界観を理解するためには様々な調査とそれを捉える「みかた」を身につけることが必要です。同じ対象でもアプローチやまとめ方は十人十色です。

ゼミでは特に地域の「世界観」を理解するために、個人の

主観によって形成される時間感覚や地域との関係に着目しています。都市に一定のリズムを刻む「時計時間」に対して、本来時間感覚とは人それぞれに持っているものです。そうした時間感覚を慣習や規範といった形で地域に積層させることで、地域の時間は特有の流れを有する唯一無二のものになります。こうした特有の時間のつくる環境が日常として、個別の事例や共同体の基盤になるような「地域」の地の部分になっているといえます。

地域に入る時は物理的に足を踏み入れるだけでなく、様々な活動、人付き合いを通して関係性が蓄積されていくべきだと思います。研究では住民の声やフィールドサーベイから地域の実情を把握することで、地域固有の課題や地域資源の再発見、再価値化などをしていき、論文として問いを立て、答えを考えていきます。そうして地域の社会関係の中に自身が含まれると感じられるようになり、関わり続けることが地域に入ることなのだと思います。

地域に入って、そこの考え方、世界観を理解するためには大きな時間と労力がかかります。論文やプロジェクト活動ではある種の「答え」を求められますが、研究では「問い」をつくることも大事です。地域で発見したものを自分自身の「問い」にして、じっくりと地域の今後や自身の将来の糧になるような「問い」を育てていくことを目指しています。

メンバー(2025年度)

【シニア】泉川 時

【M2】井上 周柚、岡本 晴佳、澤村 果那子

【M1】中内 晶太、中谷 紗季、益田 暖大

【B4】赤松 陽華、越智 翔一郎、早川 滯、藪内 洸希

■2025年度ゼミ長、中内くんからひとこと！■

ときのわゼミでゼミ長を務めています、修士1年の中内晶太です。ときのわゼミは、学年を越えて支え合える心の拠り所で、先輩の面倒見は学内でも随一！ゼミ合宿では卒論の調査対象地を訪れ、そこで得た生の学びを研究に反映することもできるので、現地に入り込んだ研究がしたい人に最適です！学びも人間関係も深めたいという人は、是非ときのわゼミに来てください！

癒しに寄与した農村観光体験



林書嫻（リンショカン） / 早稲田大学理工総研
次席研究員

はじめまして、台湾出身の林です。台湾大学の大学院に在籍していた際に、DDP（ダブル・ディグリー・プログラム）を利用して、2年間後藤研に留学していた経験があります。院から、主に「まちづくり」をキーワードとして台湾、日本で論文をまとめました。台湾ではまちづくりを「社区营造」に翻訳され、すなわち社区（まち・ムラ）を範囲として、そこで生活している住民自ら、まちを造り上げ、継続的に経営することを意味しています。私も、幅広い意味で使われているまちづくりの中で、特に营造のプロセスとその継続性に着目し、台湾の台中・台北、横浜における住民自発的な提案型まちづくりの事例を取り上げ、そのプロセスや背景としての行政制度、組織ネットワークを研究してきました。現在でも、台北の提案型まちづくりを推進している実践者達と仲良しさせていただきます。

農村健康観光

台湾で4年間企画、都市計画コンサルティングの仕事を経て、2016年より、研究助手として再び来日し、後藤研究室に所属することになった。そのなかで、研究室で取り組んだ「農村健康観光」プロジェクトで、奈良県をフィールドとして、農村の色々な

資源を癒しまたは人々の健康に寄与することができるかという問いから様々な実践的な研究を進めてきた。

農村は農業生産の場、食料や労働力などを都市へ提供するイメージが強かったが、近年は文化の伝承や自然環境の保全、癒し・レクリエーションといった農業・農村の多面的機能へとその役割の軸足を動かしたことが見えます。また、農林水産省による農村振興などの一環としても、農村体験を中心とするグリーン・ツーリズム、と農村が有する癒し効果に着目し、農村セラピー（ルーラルセラピー）が推進されていました。

それらの動きは基本的に、農村の自然・農村景観や農業体験、及びその他の温泉、食事などを付加価値として、「観光」をキーワードとして取り組んでいます。しかし、「観光」というものはかなり短期的、一回きりのものになってしまう傾向が強い、長期滞在または何回も繰り返して訪問するまでに至ることはできませんでした。

癒しに寄与する観光スタイル

造園家の Olmsted (1865) は自然を眺めれば「頭を疲れさせずに活動させられる。頭を鎮めると同時に活気づけるのだ。すると、頭から肉体へと影響が及ぶ、身体のシ

ステム全体が生き返り、ふたたび活力が湧いてくる」と述べました。

近年は高齢化、健康寿命延伸などを背景に、健康志向が高まり、観光のスタイルにも変化が生じています。旅先で「健康の回復、維持・増進を図る」行動がみられるようになってきていることから、観光に健康・癒しを求める傾向が指摘できます。

ヘルスツーリズム研究所の調査によると、「旅行に健康を取り入れたいと思いますか」という設問に対して、調査を受けた男女2000名のうち、どの年代でも7割以上が「取り入れたい・すでに取り入れている」を回答しました。いずれの調査にも旅行、観光において「健康」要素に対する関心が高い傾向を示しています。

また、荒川（2017）は、人々を惹きつける健康（ウェルネス）ディスティネーションを気候、自然、食、文化の4条件とまとめました。そのなかの「文化」は地域の伝統文化や和の文化、精神風土を資源と捉え、心身の癒しなどの価値を見出すプログラムとして開発する可能性が示されました。しかし、ヘルスツーリズムといった分野において、依然として森や温泉といった自然資源を活用し、メンタルケアに寄与するイメー



ジが強いです。そのなか、お寺の参道や城下町、古民家などの里山風景を取り入れたツアーも徐々に注目され始め、地域文化の要素・資源を生かしながら、体を動かすなどのコンテンツを取り入れ、健康推進や癒し効果を目指す新たな観光スタイルを提供していると言えます。特に、このような観光スタイルは同じ地域に断続的訪ねることが重要なポイントになりつつあります。

癒しの景観と 農村の“地域性”としての 「ほんもの」

「癒し」はキュアとケアの対比の中で使われることが多い。キュアは手術のように対処療法的に、外部から部分に対して作用をし、ケアは患者の疾患への全人的世話によって癒しを与えるものであります。

90年代前半に、Gesler (1992) によって「癒しの景観 Therapeutic landscape」が提案された。「癒しの景観」は身体・精神・スピリチュアルに対する癒しの効果が有する地域 (place)、装置 (setting)、状況 (situation)、場所 (locale)、人間を取り巻く「場」としての環境 (ミュー、milieu) であります。とくにそのような癒しの景観は自然形成または人工から創出する景観とします。また、その特定の場所がいかにして癒しなるもの therapeutic として受け入れられたのかの理解を促しました。すなわち、そのような癒しの景観を形成する背景としての社会・文化的条件や文脈を把握する必要があります。

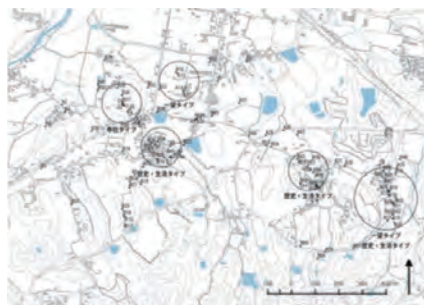
しかしながら、前述のような観光のブームのなかに、農村を観光化地することに、商品化による画一化されたものが生まれ、どこの農村地域でも同じ体験しかできないという可能性もあります。農村が有する“地域性”すなわち「ほんもの」の提供ができないという懸念が生じます。

「ほんもの」を提供するなら、「物事の事象を文化的文脈に位置付ける」のはずだが、

ローカル視点に立つとは何か、そしてその真正性 (authenticity) をどう確保するか、提供されるものは本物の (authentic) かつ偽物ではない (genuine) ということが課題になる。前述の癒しの景観にも共通し、景観とその背景にある文脈を切り分けて論じることではできません。

癒し効果はどう測るか

そのかなで、地域性が確保された景観を含んだ体験はどう提供するか、その効果はどう測るかは課題となりました。具体的に、前者は地域住民を対象としたオーラルヒストリー (語り) 調査を行い、調査で採集した癒し (Therapeutic) に関する知恵・経験というローカル・ノレッジ (地域固有の知) を用いて、印象評価で設定された多様な景観が含まれるガイド付きの散策ルート、体験プログラムを作成しました。それは、住民の語りを場所と紐づくように編纂したものから、地域性を確保しようとしていました。



・印象評価からみた多様な景観

次いでは、そのガイド付き散策、体験プログラムに参加した被験者を対象に、体験の前後に測定を実施し、その前後の差から効果を明らかにします。数値的には、既往研究のレビーから、フリッカーテスト (精神的疲労度を測るもの)、POMS2 (アンケートである時の気分を測るもの) などを用いました。前後の差から、有意である精神的疲労度の軽減、気分の向上などの傾向を把握できます。しかし、景観・体験による癒

しの効果とその程度を観測することができると、どの部分からの影響が大きいなどの判断が難しいため、自由記述の印象調査又は行為中録音した発話内容からの分析も行なう必要があります。

奈良県で実施した実証実験から、すでに前述のようなローカル・ノレッジが含まれた体験に参加したことによって、癒し・健康に良い効果が見られる結果が出ました。しかしながら、例えばその効果の継続性、資源はあるがどう提供・運営するか、本物としての保証ができるかなどいくつかの課題も見えてきました。上記の課題を含める内容、及びある程度確立できた測定手法をほかの場面で応用できるか、はわたしの研究テーマです。

最後に、外国人として、特に都市計画・まちづくりという、フィールドと密接した領域のなかで勉強することは日々難しいと感じています。言葉的な問題のみならず、文化的、社会背景的な部分からの影響も強く、常に目の前の物事に疑問を持つことになってしまいます。しかし、かえって縛りがなく、異なる視点から現場をよく観察することができ、自分なりの見解、切り口で物事を吟味することもできると思います。わたしは都市計画・まちづくりは、観察力が不可欠だと考えています。観察から生じたそれぞれの疑問は、議論に発展することにつながります。お互い議論しながら、お互いから学べることができれば嬉しいです。



地域と物語

近代化遺産の保存継承を通して 「景観」と「記憶」を考える



リム ジョンミン
林 廷玟 / 早稲田大学理工総研
次席研究員

地域活性化の有益な「種」として 近代化遺産を捉える

2014年に世界遺産登録された「富岡製糸場」や、2015年登録の「明治日本の産業革命遺産」について、みなさん一度は耳にしたことがあるのではないのでしょうか。これらは「近代化遺産」「産業遺産」と呼ばれ、幕末から昭和初期の社会背景や生活様式を現代に伝える文化的遺産として、近年その価値が見直されています。私は近代化遺産を研究対象として、遺産の保存継承を通して、新たな「景観」解釈の在り方について考える研究を行っています。

建築学科で遺産について考えると聞くと、著名なシンボリックな建築物を対象として古さや希少さなどの物理的価値に着目する研究なのではないかと考えるかもしれませんが、「都市計画」分野において近代化遺産をはじめとする歴史的建造物に着目する意義は物理的価値だけに留まりません。

遺産の中でもとくに近代化遺産は物理的な価値を持つことに加えて、国や地域の発展においてこれらの遺産が果たしてきた役割、産業近代化に関わった先人たちの努力など、

非常に豊かな無形の価値を物語るものであり、地域活性化の有益な「種」となり得るものとして大きなポテンシャルを持っています。先人の歩みを象徴し、地域がこれまで紡いできた文脈、いわば「地域の物語」と呼べるような無形の価値を継承する存在として近代化遺産を保存するためには、人材や技術・物資等の交流にも着目する必要があり、遺産の周辺地域の環境までもを含めた有形無形の諸要素を包括的に保存継承する手法の確立が求められています。このような遺産を取り巻く環境に関して、環境の中で営まれた人々の生活の特色が現れた景観を評価するものとして、文化的景観という概念が存在します。近年、近代化遺産等に代表される巨大な土木構造物・人的構造物に対する眺望を「テクノスケープ」と定義し、広い意味での文化的景観として取り扱う例も増えています。

しかし、近代化遺産の保存活動の実態としては、近代化を特に象徴する極一部の施設を点的に保存するに留まるものが多く、産業遺産を「景観」の重要な要素として捉え、遺産が空間・景観に与える潜在的可能性については十全たる議論は展開されていないのが現状です。

近代化遺産の保存継承を通して 新たな「景観」解釈を考える

近代化遺産への関心は20世紀末からヨーロッパを中心に再熱しつつあります。近代化遺産への関心が高まることは喜ばしくもありますが、一方で表象的な理解にとどまる可能性も孕んでおり、そうなる近代化遺産への盛り上がりは単なる一過的ブームに終わってしまうことは自明です。

近代化遺産を地域活性化の有益な種として生かしていくためには、どのように近代化遺産を理解するか、その近代化遺産に対する理解の蓄積とも呼べるような「記憶」をどのように継承していくかを考えていく必要があると言えます。

近代化遺産に関する「記憶」を、現代に残る「景観」と結びつけ、大小の有形無形の諸要素を「面」として一体的に保存継承していく議論はいまだ始まったばかりです。私は近代化遺産に関するこの研究を通して、新たな「景観」解釈を考え、これまでの景観保存論では取り零されてしまうような要素を拾い上げることが可能な新たな景観保存手法を確立することを目標としています。



画像提供：富岡市

▲2014年に世界遺産登録された「富岡製糸場」(群馬県富岡市)



▲上：長崎県端島(軍艦島) / 下：和歌山県友ヶ島第三砲台

近代化遺産が持つとされている 「物語」とは何か 誰が紡ぐ「物語」なのか

近代化遺産に対する取り組みとしては、2007年および2008年に経済産業省によって行われた「近代化産業遺産 認定制度」があげられます。経産省はこの認定制度において「近代化遺産の価値」を【ストーリー】としてまとめており、これは「近代化遺産が持つ価値をより顕在化させ、地域活性化に役立てることを目的として、産業史や地域史のストーリーに整理・編集」したものとされています。

経済産業省による当認定制度は確かに近代化遺産を定義づけた国内の先駆的存在であり重要なものではありませんが、遺産の「価値」としてまとめられた【ストーリー】は、はたして「遺産が持つ本来の価値」を示すものであるのか、という観点で考えると、このストーリーは手放しで賞賛できるものではないという意見があります。すなわち『この経産省が提示した【ストーリー】とは、本当に地域住民が考える【地域の物語】と同様であるのか。』という意見です。

この指摘に関して一つ例をあげましょう。一番わかりやすい例として度々議題にあげられるのは「軍艦島」に関するストーリーです。軍艦島をめぐるのは、「近代化の礎」の表象、戦時中の強制連行・強制労働の「負の記憶」の表象、元住民による故郷としての表象など、様々な意味付けが存在しています。

こうした様々な表象と意味付けに対して、軍艦島を「長崎の記憶の風景」として捉えるにあたっては、空間的・時間的な問題への指摘が浮かび上がります。

すなわち具体的には、

①空間的な問題として、2005年の合併以降に長崎市となった軍艦島の記憶を、「長崎の」記憶の風景として捉えることの困難さ

②時間的な問題として、世界遺産登録運動時に「近代国家日本の発展の礎」として位置づけられているがそれは言わば「歴史」の範疇にあり、軍艦島での実際の労働・生活について語ることでできる経験者の「記憶」とは時間的なずれがあること
という2点です。

近代化遺産の一つの「歴史的資産」としてまとめるためには、全ての記憶を拾い上げることが難しいことは確かですが、軍艦島の例は「世界遺産登録におけるポリテクスの制約」により生じた表象的な【ストーリー】と、地域住民…この場合は軍艦島・端島を故郷とする元住民が考える・あるいは持っている【地域の物語】とのズレの一例であると言えます。

共起ネットワークのうち、特に名詞単語に着目し名詞同士の関係性およびその他単語との関係性を描いた。線が太くなるほど単語同士の結びつきが強く、ノードの円が大きくなるほど単語の「重要度」が高いことを示している。



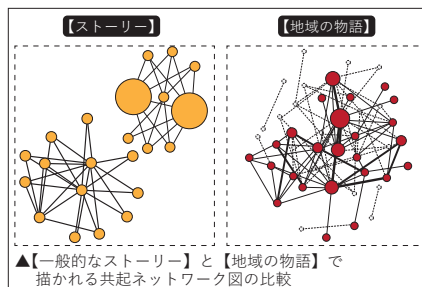
▲集めた語りに対してグラフ分析を行なった例（共起ネットワーク図）

研究手法の紹介： 【地域の物語】を実際の語りから 捉えて可視化する

こうした近代化遺産が持つ【地域の物語】を正確に捉えることが、近代化遺産の持つ本来の価値を知る上で重要と考え、私はまずこの【地域の物語】を可視化する研究を行いました。以下に私の研究の一部を紹介します。

研究では、近代化遺産に直接的に関わってきた住民の「実際の声（語り）」を採集し、住民が近代化遺産について語る際にどのように「話題の選択」と「異なる話題同士の連関」を行なっているのかを共起ネットワーク（例図：ページ右上）を描く「グラフ分析」「テキストマイニング手法」を行いました。語りを集める研究手法は「ライフヒストリー」や「オーラルヒストリー」に通ずる調査の延長にあたります。

この調査と分析の組み合わせによって「近代化遺産という枠組み」の中で、一見無関係に思える複数の語り同士繋がりを持ち、総合して物語を紡いでいる、ということを実際の可視化することが可能となります。



分析の結果、大別すると上記のような2種類の図が得られます。これはすなわち、「一般的に近代化遺産の価値とされている【ストーリー】」と「住民が考える近代化遺産の価値を示す【地域の物語】」にはやはり違いがあり、【地域の物語】のほうが複数の話題の連関性が高いということを示しています。

では以上を踏まえて、この両者にはどのような違いあるのかを詳細に見ていくと、【ス

トーリー】内に出てくる近代化遺産やそれにまつわる話題は比較的著名な建築物やエピソードが多い一方で、【地域の物語】内に出てくる近代化遺産や話題は、従来であれば取り零されてしまうような無名の建築物やエピソードが含まれていることが明らかになりました。加えて、このネットワーク図を構成する単語同士の連関には「景観」が大きなファクターとなっており、豊かな【地域の物語】を描く上で「景観」を考えることが重要であるという結果が得られました。つまりまとめると、豊かな【地域の物語】のためには「景観保存」が重要であり、かつ【地域の物語】を重視して遺産保存を考えることによって、より広い範囲の近代化遺産（建築物やエピソード）を拾い上げることが可能となり、近代化遺産の保存範囲や対象に対して有用な新規知見を得ることができたということになります。

都市計画を学ぶ上で：

「1 + 1」が「2」以上となる 「間」について考える

私の研究の根底には都市計画においては、『「1 + 1」が「2」以上となる』という考え方があります。これは、【人】や【建築物】などの「まちを構成する要素」を1としたとき、それらを組み合わせることで「人と人の関係性」や「人と建築物の関係性」などの『間』が生まれ、その合計値が「1 + 1」以上になるという考えです。

価値が見出されづらい近代化遺産を単独で見ると、それらは「1」かそれ以下にすぎないかもしれませんが、遺産同士の関係性や、遺産とそれを語る人との関係性が生まれることによって、「要素の合計値」以上となる可能性が現れます。このような目に見えない豊かさや価値を掘り上げられること、それにより世界の見方が変わるところが都市計画研究の面白さだと考えています。

宇佐八幡宮創建 800 年祭 による笠居郷神産学連携 まちづくり



泉川時 いずみかわ・とき / 助手

香川・東京の二拠点居住生活 神主ドクター

こんにちは、泉川時です。私は香川の宇佐八幡宮という神社の宮司をしながら助手をしております。いわゆる二拠点居住をしていて、どちらが本業かと問われることも多いですが、どちらも本業で、香川にいても研究をしているし、東京にいても神社のことでよく電話が鳴ります。みなさんには香川での「研究」の部分に着目して話したいと思います。

次の 800 年をつくる宇佐八幡宮 創建 800 年祭の 3 つの目標

私の奉職する神社は香川県高松市香西本町に鎮座する嘉禄年中（1225-27）に創建された宇佐八幡宮です。そのため、令和 7 年から令和 9 年までを創建 800 年祭の年と定め、種々活動しています。笠居郷には 50 社以上の神社があり、それらを宮司として維持管理しています。私はこの創建 800 年祭を通じて、これからの 800 年をつくるため、3 つの目標を掲げました。1 つ目は氏子組織の再編「氏子圏の再構築」、2 つ目は神社の

暦の更新「神社の衣替え」、3 つ目は地域の再生のための「神産学連携」です。「氏子圏の再構築」では、現在の自治会に依存した体制を見直し、氏子区域内外で活動に賛同していただける新たな氏子を獲得し、持続可能な体制を築いていきます。「神社の衣替え」では、現在のライフスタイルに即した暦への作り替えを目指します。稲作の暦に合わせて循環する神社のお祭りを、地域の多種多様な生活に合わせて更新します。「神産学連携」では、神社を中心に民間企業と教育機関・研究機関の三者連携による地域社会の再生を図ります。

他分野の共同による神社の研究

これまでの活動では、地域住民の方はもちろん、わせけんの様々な方に協力していただいています。小岩正樹研究室には毎年夏に建築の実測調査をしていただき、2024 年度に調査した随神門は現在それに基づいて修復工事を実施しています。渡邊大志先生には共同研究で、神社の新しい神事のデザインをしていただいています。後藤研で次席研究員をされていた民俗学者の山川志

典さんには秋季例大祭の調査をしていただいています。都市計画系の醍醐味は分野を横断しながら俯瞰的に「計画」を構想することだと思います。建築史、建築計画、民俗学といった、神社や自分の関心と親和性のある分野と共同しながら、宇佐八幡宮・笠居郷がどういった場所なのか研究をし、いわゆる地域活性化のためのまちづくりを神社を核に据えて行っています。そこでは後藤研の学生有志「ReGENE」も一緒に活動しています。

小さな取り組みから 大きな構想の策定へ

2024 年度は「海の文化」ワークショップを企画し、①港町の海の文化のヒアリング、②香西小学校 6 年生の総合学習での授業、③節分祭「おんのまいいた〜」企画・運営・展示他を行い、その成果報告としてトウキョウ建築コレクション 2025 プロジェクト展に出展し、須部恭浩賞（三菱地所設計）を受賞しました。①では人口減少の激しい港町にある漁師と船乗りの海の文化とその信仰のオーラルヒストリー調査をしました。②では海の文化を伝え、航海に欠かせない伝達手



これらは既存の教育機関、練り物連、地域企業に対して、目的意識を共有し結束力を強め自由に動きやすい団体をつくる狙いがあります。これを通じて、地縁組織と希薄な関係性にあった「地域企業」「自治会非加入世帯」「転出した元住民」を地縁組織に結びつける取り組みを展開していきます。大きな組織を一つ作るのではなく、小さな組織を複数作ること、目的意識と役割を明確化し、途中参加者も主体的に活動しやすい小規模多機能自治組織をめざします。地元企業の協賛と人材交流を通じて地域経済の循環と人材定着を促進し、地域課題を自立的に解決できる基盤づくりを進めることを目的としています。

2025 年度の学生との取り組み

また、こうした構想の策定に並行して、
ReGENE とは夏越しのお祭りの「衣替え」



節分祭「おんのまいいた～」の
集合写真（令和7年）

を企画しました。伝統的な讃岐提灯を人びとの願いを宿し共有するツールとして再解釈し、3つのプロジェクトから神社とまちを結びつけ、住民が交流しやすいお祭りの仕組みをデザインしました。1つ目は子どもたちとのWSで作成し、願いを届ける象徴になる「讃岐一本掛け提灯」、2つ目は境内の流れをつくる「参道提灯展示・行列」、3つ目は地域とつないでいく「提灯スタンプラリー」のデザインです。こうした取り組みの上に、地元のダンスや詩歌のステージなどが加わり、ビフォーコロナでは50人も来ていないようなお祭りの参拝者が3,000人を超えるまでになりました。

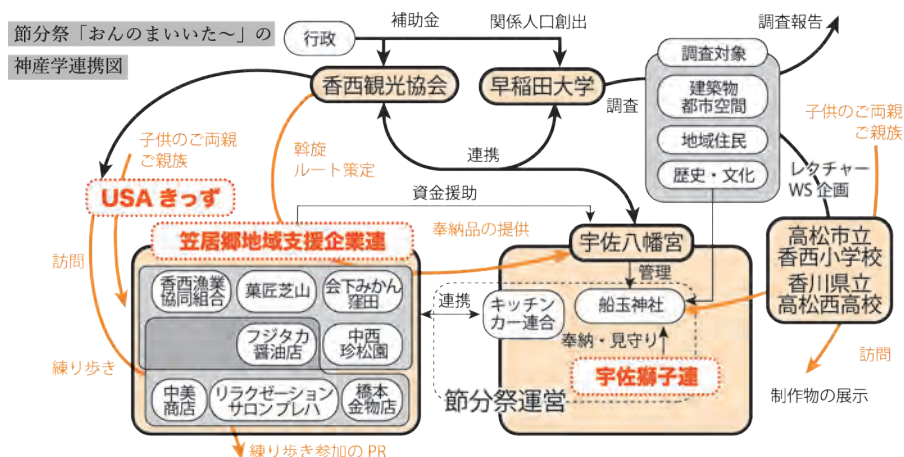
研究と実践によって成立する ビジョンの共有

こうした取り組みと共に、そもそも現況の神社をめぐる環境を評価するため、神社が守護する範囲である「氏子圏」に着目して研究をしています。氏子圏の規模は、それに応じて、神社の立地や、境内の構成、年中行事の豊富さが変化する神社の大事な指標になります。また、氏子圏内の神社と

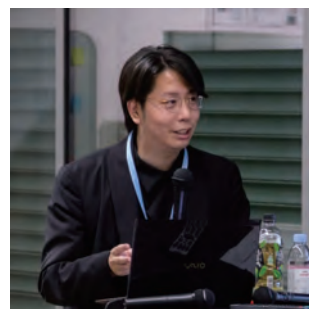
自治会の関係からは、運営形態が自治会に依存している実態と、両者を切り離して組織体制を構成する理念のギャップがみられます。このような構造的な課題や現状把握は、そこからすぐに変化させていくことは難しい一方で、長期的なビジョンを計画していく上では非常に重要です。一つひとつの活動は地道で、それがどこまで地域の未来を変えられることができるのかかわらないまま、それでも進めていくものです。さらにそれは一人では決して辿り着くことのできない道です。共同できる人たちと同じ方向を向くためには、みなでビジョンを共有する必要があります。それは、ことばだけでは足りず、景観として可視化し、共同している人がその景観の中に入っていくことが重要です。創建 800 年祭では、そのために笠居郷神産学連携まちづくりを進めていき、神社だけでなく、その地域を再編していく機動力を生み出していきます。

過渡期を楽しむ自由な研究の
環境づくりへ

創建 800 年祭はまだまだこれからです。だからこそ、過渡期の面白さがあり、研究・実践を重ねています。みなさんが研究室に入ってゼミに参加するようになると、そこで話すことも途中経過です。毎週毎週少しずつ論文を書き進め、経過を伝え、次に何ができるか一緒に考え、一つずつ蓄積させていくことで、卒論など研究活動が進んでいきます。興味関心は十人十色ですが、その過渡期の思考法は研究室の宝になります。みなさんもこれまでの宝を応用しながら、自分自身の研究テーマを広げてください。私も一緒に議論をしながら自由な研究の環境をつくっていきたいと思います。



計画の根源を問う〈都市論〉 というフィールドを開拓する ——「欲望の地理学」と「迂回する経済」の探求



吉江俊 / 東京大学講師
(2025年4月～)

こんにちは、吉江です。2015年から10年間、後藤研究室で「空間言論ゼミ」というゼミを構えて、卒論や修論の指導を行っていました。2019年からは建築学科の講師を務めていましたが、2025年からは東京大学の教員になりました。ただしこれからも、論文やプロジェクトの指導で、ときどき顔を出す予定です。

「欲望の地理学」： 物理的空間から遊離した イメージの空間をとらえる

私の都市論は、消費社会論から始まりました。消費社会論とは、社会を駆動する原理が「消耗」から「消費」に移った社会を論じるものです。たとえば、洋服に穴が開いたから買い替えるのは「消耗」ですが、洋服がダサく感じるために買い替えるのは「消費」です。消費とは、もの自体ではなく、ものの情動的価値を使い切ることによって、ものが不要になり新しいものを欲するまでのサイクルが速まることなのです。

消費社会の到来は1980年代から議論されてきましたが、都市がどう変わってくるかという話は限定的でした。そこで、民間企業による都市開発が都市のイメージを次々に変化させ、開発の流行り・廃りを加速させ、人びとのライフスタイルや地域イメージが商品として切り売りされていく、そのプロセスを解明しようというのが、わたしの学生時代を捧げたテーマでした。私は

これを「欲望の地理学」と名付けて、最終的には博士論文と最初の単著『住宅をめぐる〈欲望〉の都市論』にまとめました。

消費都市論の脱出口： 民間都市開発の意義を拡張する 「迂回する経済」の計画論

「消費」が都市をどのように変えていくのかを、批判を含めて分析していくことはできましたが、それではこの問題をどうすればいいのかは悩ましいところです。いまの答えのひとつは、「消費社会の問題は消費社会の内部で解決する」というもので、「迂回する経済」と名付けました。

「直結する経済」に基づく都市開発の場合、オフィスや商業のテナント料をたくさん稼ぎたいので、建物をぎゅうぎゅうに建てて、床面積を最大化します。これが集中して行われると、元の地域の魅力は破壊されるでしょう。

いっぽう「迂回する経済」では、豊かな空間をつくるのがむしろ客滞在時間を延ばし、リピーターを増やすことでさらなる経済につながる、という主張をします。民間都市開発の視野を拡張、従来は「無駄」と思われていた様々なことを実現する回路をつくり説得することが、大学のひとつの役割ではないかと考えています。ひとまずこの成果は次の単著『〈迂回する経済〉の都市論』になりました。嬉しいことに反響があり、実践の仕事も始まっています。

批判的精神と都市の観察から 「サード・オーダー」を獲得する： 吉阪隆正の都市論

数年前、東京都現代美術館で開催される「吉阪隆正展」の企画に携わりました。吉阪は建築家としても都市計画家としても活躍し、「都市の巨大な空間をデザインすること」「個人の存在に寄り添う」ことがどうしても両立できないことに、苦しんだ人物でした。そして彼は、都市なスケールと個人のスケール、メガロポリスと自然環境、そういったものを「克服止揚する」ことがデザインの役割だと考え、「不連続統一」などの独自の用語を次々生み出しました。

私はこの考え方にたいへん共感します。そしてこれを、近代的な二項対立を脱する三つ目の考え方を提示する「サード・オーダー」と呼ぶことにしました。私が10年取り組んできた「空間言論ゼミ」も、近代の二項対立を脱する第三の道を、都市の観察によって発見していくゼミでした。様々な議論を経て、そもそも都市とは何か、計画とは何か、人間がどこまで都市を計画することができるのか／すべきなのか…と突き詰めていく10年でしたが、これから私は「アーバンデザイン」の本丸（丹下健三の作った講座）に乗り込むことになったので、また新しい活動へ進んでいきます。

ぜひ、一緒に話しましょう。お互い学びの多い研究室生活ができればと思います。



- ①単著『住宅をめぐる〈欲望〉の都市論』春風社（2023）
- ②単著『〈迂回する経済〉の都市論』学芸出版社（2024）
- ③共著『クリティカル・ワード現代建築』フィルムアート社（2022）
- ④東京都現代美術館「吉阪隆正展」企画監修（2022）

スキー場開発の傍らで再編され持続してきた「自然共生的な暮らし」の実態

―白馬岩岳マウンテンリゾート周辺の4地区に着目して―

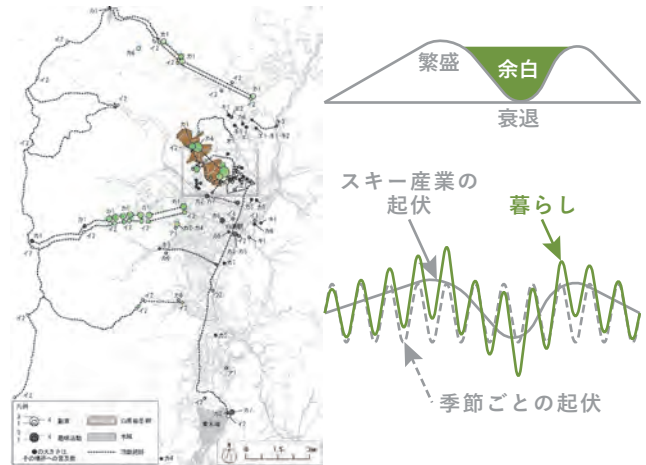
青木 紳 (M2)

研究の概要：

スキー場開発の傍らで暮らす人びとを対象とし、過去、現在、その過程の暮らしの実態を明らかにした。そのうえでスキー場開発の恩恵を受け、確立された「自然共生的な暮らし」の存在とそれが及ぼす中山間地域における暮らしの持続性への作用を考察した。

結論：

スキー産業が大きく成長したバブル - 長野五輪期に経済的に充実し、その後の低迷期で経済的、精神的ストレス、時間的余裕を埋めるための副業、趣味活動として「自然共生的な暮らし」が獲得され、持続してきた。季節産業であり、スキー産業自体が数年で変動することが暮らしに流動性と持続性をもたらし、大規模林野開発が逆説的に中山間地域の暮らしの持続に起因していたことが得られた。



空間言論ゼミ

20世紀末以降の「都市展」にみる江戸・東京表現の変遷

―江戸と東京を縫合する言説とアイデンティティの再構築に着目して―

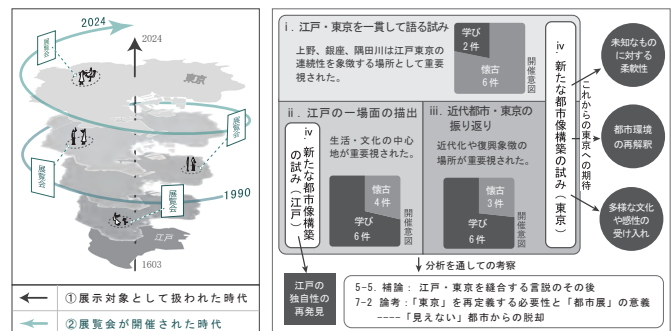
海老澤 理々華 (M2)

研究の概要：

20世紀末以降の「都市展」における江戸・東京のイメージ形成とその変遷を、50の展覧会を対象に分析を行った。「江戸・東京を一貫して語る試み」「近代都市・東京の振り返り」「江戸の一場面の描出」「新たな都市像構築の試み」の4つに分類し、各々の展示内容や開催意図、都市への期待の変化を明らかにした。

結論：

都市展は20世紀末以降、計画や理念の提示から、都市そのものの展示へと移行した。その中で江戸と東京は、社会問題の議論促進と懐古の2つの目的で結びつけられ、伝統と革新を象徴する場所が表現の対象となった。さらに、都市展において東京は、未知への柔軟性、都市環境の再解釈、多様性の受容が期待されていたといえる。



空間言論ゼミ

「環境浄化」が行われた黄金町周辺のアート・生活圏と交錯する風俗街の考現学的調査

長田 祐毅 (M2)

研究の概要：

違法風俗店を摘発する「環境浄化」が治安改善の適切な手段ではないと仮定し、その実態を考現学的に調査した。「環境浄化」の代表例である黄金町でのアートを利用したまちづくりは、実態と世間からの評価に乖離があり、計画を見直す必要性を指摘した。

結論：

黄金町に現存する元風俗店舗はアート施設として利用されているか否かによる外観の差が少なく総じて地味であり、内観も風俗店舗の使いづらい特徴を残しているため、適切な改修が行われていないことを明らかにした。従って今後は、場所性やアートがもつ本来の意味を理解したうえでまちづくりをすることが、黄金町に「環境浄化」された場所としての存在意義を与えることになるとした。



空間言論ゼミ

物理空間・情報空間を横断するアーバンスポーツにみる都市の〈遊具化〉と〈舞台化〉

ーフリースタイルバスケットボールを対象としてー

永田一真 (M2)

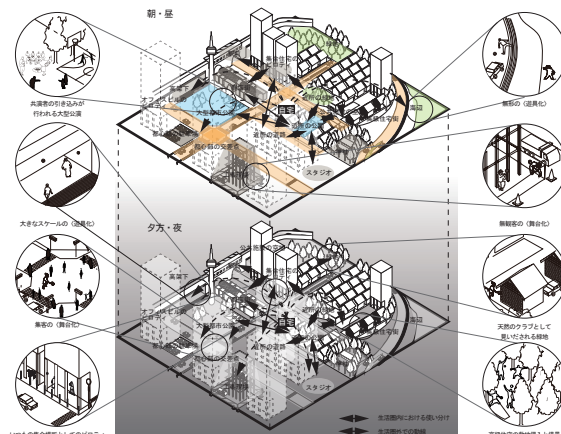
空間言論ゼミ

研究の概要：

遊び場が制限される近年の動向の中、自発的に遊びを見出す行為を〈遊具化〉と〈舞台化〉と称し、それらの行為を誘発する環境要素と人為的要素を明らかにした。そのうえで、遊びが自発的に見出される都市の全体像について考察した。

結論：

都市の設置物を遊びに転用する〈遊具化〉と、遊び場にふさわしい場所を舞台として見出す〈舞台化〉はいずれも「周囲からの視線」に制約されるが、舞台としての「唯一性の追求」によって存続していることが明らかとなった。また、両行為は SNS への発信を介した情報空間と物理空間の往来によって助長される。これらを含めて、4 種の場所類型とその適切配置によって顕現する都市像を得た。



リミナルスペースにみる都市空間に対する「不気味さ / 懐かしさ」の喚起

ーインターネット上で共有される無人空間の画像とその書き込みに着目してー

朝倉健人 (M1)

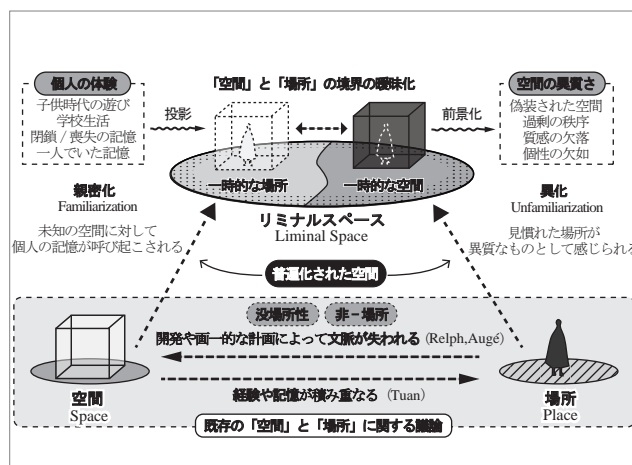
空間言論ゼミ

研究の概要：

インターネット上で広がるリミナルスペースの全体像を把握することで、都市空間の構造や個人の体験との連関を明らかにした。そのうえで、現代における「空間 / 場所」に関する議論に対するリミナルスペースの位置付けを考察した。

結論：

リミナルスペースの「不気味さ」は無人化による文脈喪失が招く「異化」、「懐かしさ」は空間の普遍性が記憶を接続する「親密化」であり、共に現代の都市の普遍化された空間に由来することが明らかとなった。すなわちリミナルスペースは、「異化」「親密化」が交錯し「空間」と「場所」の境界が効力を失った領域であり、現代都市における空間認識の再考を促す新たな知見が得られた。



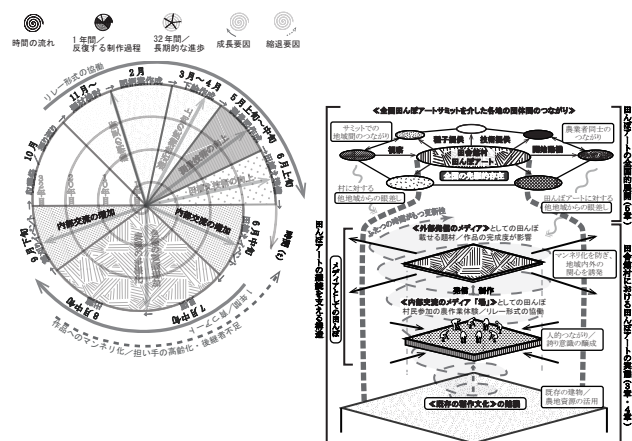
「無手勝流のまちづくり」としての長期継続する田んぼアートの実態と持続可能性

菊池和成 (M1)

空間言論ゼミ

【研究の概要】 青森県田舎館村の“田んぼアート”を対象に、ひとりの村民の発想から 1993 年に始まった実践が、単なる観光イベントではなく、地域に蓄積する“無手勝流のまちづくり”として成立してきた実態と要因を明らかにした。新聞記事の変遷整理、関係者へのヒアリング等を通じて、田んぼアートの全体像を考察した。

【結論】 田んぼアートは、一次産業由来の自然的性質（稲作の一年周期や生育の不確定性）と人間が共発する条件のもと、行政と住民による担い手のリレー形式の協働運営を獲得し、さらに地域内に閉じない他地域への展開を通じて長期継続してきた。以上より、洗練された制度設計では捉えきれない“無手勝流のまちづくり”が持つ持続可能性と波及性を示す実践として評価し得ることを提唱した。



専門知の開放が進みつつある専門店街にみる「創造連鎖」

—卸売から小売中心へ変化している 日暮里繊維街に着目して—

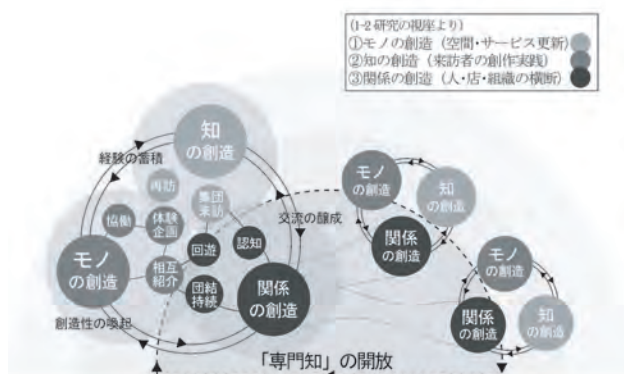
藤原 静乃 (M1)

研究の概要：

日暮里繊維街を対象に、専門店街が蓄積してきた「専門知」の開放がもたらす、サービス・空間の更新（知の創造）、来訪者の創作実践（モノの創造）、人・店・組織の横断的關係形成（関係の創造）の循環を「創造連鎖」とし、その相互作用のプロセスを考察した。

結論：

卸売から小売重視への転換の中で専門知が一般に開放され、来訪者の創作実践と店舗・組織の協働を結ぶ三層の創造ネットワークが形成されていた。「創造連鎖」は、知識・空間・人のふるまいを循環させつつ、ワークショップ等を通じて再訪や交流を自己強化的に生み出す。単なる物販の場にとどまらない、人の創造性とまちの活力が共進化する、専門店街の「再生成的なあり方」の萌芽を示した。



路面電車における車外の知覚が促す沿線への想起と連想

—東京さくらトラム車内で乗客が交わす会話の「誘発」と「展開」に着目して—

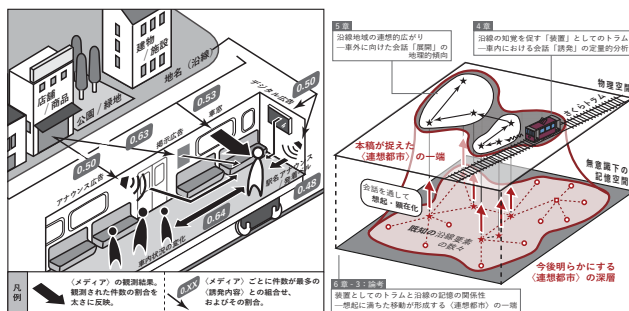
松村 爽冴 (M1)

研究の概要：

都心周縁を低速で結ぶ東京さくらトラムの車内で交わされる乗客同士の会話に着目し、同路線がもたらす「徒歩旅行」的な移動体験が、乗客に住み慣れた沿線地域への連想を促している実態を明らかにした。その上で、移動の高速化・効率化が進む現代における、低速で走行し周辺環境との近接性を保つ交通形態の意義を考察した。

結論：

乗客は、車窓風景のみならず車内掲示広告やアナウンス等からも会話を誘発され、会話が展開する過程において次々に沿線の場所に関する語りを発した。これより、乗客に沿線を知覚させる複合的なメディア装置としての車両と、彼らの記憶や関心が潜在する周辺の沿線地域とが重なることで立ち現れる、【連想都市】の一端を捉えた。



歴史的市街地におけるライフスタイル起業の連鎖の実態と要因

—栃木市嘉右衛門町伝統的建造物群保存地区を対象にして—

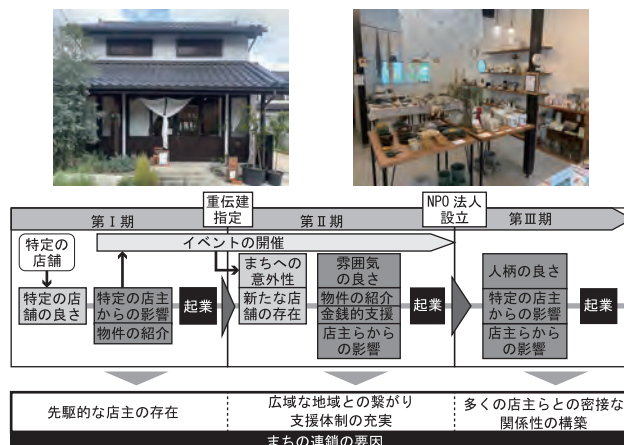
櫻井 友紀子 (M3)

研究の概要：

自身の理想のライフスタイルを志向し、起業する「ライフスタイル起業」を行う者が多く集まるとされる栃木市嘉右衛門町伝統的建造物群保存地区において、ライフスタイル起業の変遷と、ライフスタイル起業の促進要因として歴史的建造物をはじめとした地域資源の役割を明らかにした。

結論：

ライフスタイル起業家は地域資源により起業を行い、その起業によって地域に新たな資源が蓄積され新規のライフスタイル起業家が起業を行うという連鎖が生じていることが明らかになった。



寿地区における活動団体がつくる擬似的な地縁型コミュニティの実態

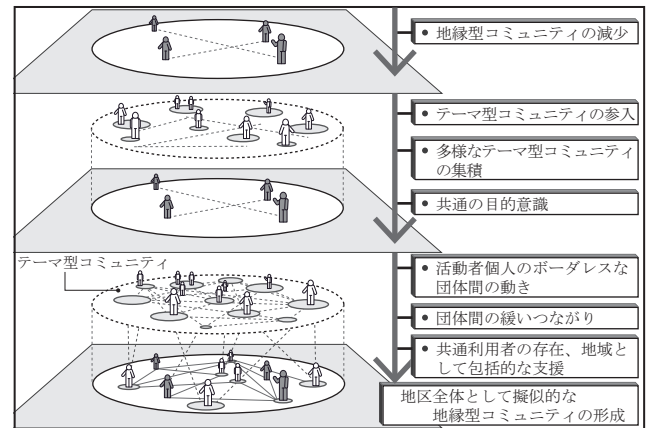
石山結貴 (M2)

共域ゼミ

研究の概要：

本研究では、横浜市中区に位置する寿地区で地域活動を行う団体、社会資源を運営する団体を特定の目的に限定したテーマ型コミュニティと捉えた。テーマ型コミュニティの集積と地区内でのつながりにより、地区全体として多様な目的や切り口を持ち包括的な対応が可能となり、擬似的な地縁型コミュニティになる可能性を検討した。団体間の関係性を明らかにするため半構造化インタビューを行った結論：

結果、共通の目的意識、テーマ型コミュニティの集積、制限力の弱く緩いまとまりの団体による活動者個人のボーダレスな活動により、団体間の関係が発生、維持されていた。団体よりも個人の活動が地域に帰属し擬似的な地縁型コミュニティが形成されていた。



個人店舗集積地での回遊に伴う店舗内を含む景観体験

—東京都杉並区高円寺における古着店街を対象として—

佐野翔哉 (M2)

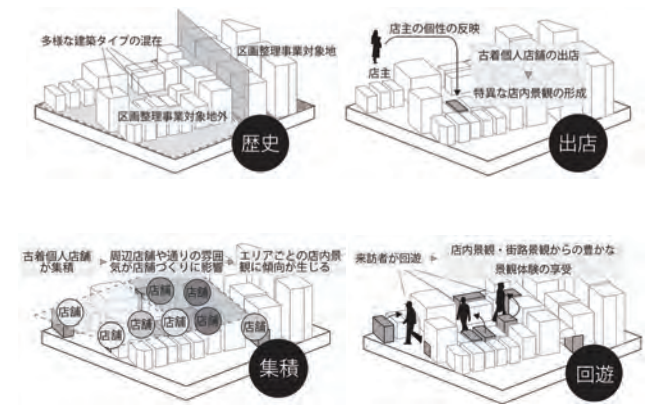
共域ゼミ

研究の概要：

古着個人店舗の集積が生む景観の実態と、その形成要因、そこでの来訪者の回遊行動の調査から、古着店街における景観体験の様相を明らかにした。そのうえで、小規模かつ個性ある古着個人店舗が集積することの価値について考察した。

結論：

古着店舗の個性ある店内景観は、店主の個性だけでなく、周辺の店舗や通りの雰囲気にも影響を受けていることが分かった。そのことにより、古着店街の中でもエリアによって景観の傾向が生じていることが明らかになった。また、来訪者の多くが複数店舗を巡るような回遊行動をとっており、来訪者に豊かな景観体験が提供されていることが考察できた。



ミニシアターを取り巻く〈語らい場〉における当事者意識の醸成

松島汐音 (M2)

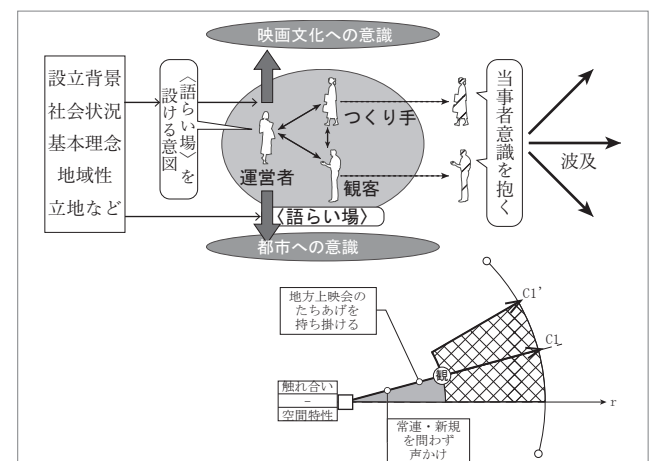
共域ゼミ

研究の概要：

ミニシアターを取りまく映画上映を契機として生じる〈語らい場〉の実態と形成背景を明らかにした。そして語らいがどのように人びとの当事者意識を醸成し、都市へと波及するのかを解明し、まちづくりにおける、文化芸術を介して語らう場の意義を考察した。

結論：

〈語らい場〉は【運営者と観客】間で、【上映後のロビー】【舞台挨拶やトークショー】において多くみられた。〈語らい場〉から都市へと波及するシアターでは、当事者意識が、【上映会や映画会の立ち上げ】【テーマコミュニティの創出】【個々人の活動や生き方への還元】の三つの行為として現れていた。そして、独自のテーマ性と地域への視座を持ち合わせた語らう場の重要性を提唱した。



新規参入の店主・店員が構築するハモニカ横丁のコミュニケーションの実態

—1990年代以降に参入した店主・店員と運営主体の変遷に着目して—

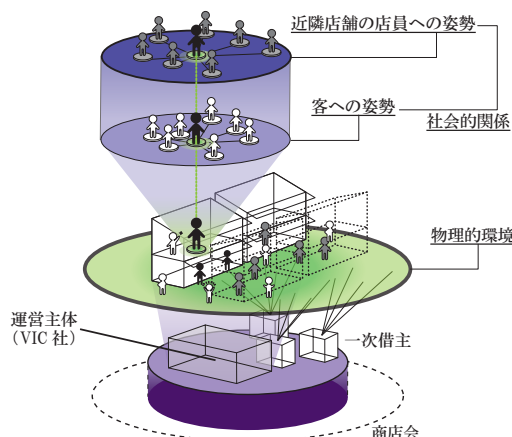
森映介（M2）

研究の概要：

1990年代から参入した店主・店員に着目し、横丁をとりまく関係主体の変遷と、店主・店員を中心としたコミュニケーションの実態を明らかにした。そのうえで、運営主体の体制の重要性とコミュニケーションを維持するための環境について考察した。

結論：

VIC社による運営主体や一次借主により、店舗を下支えする体制が整うことで、多様なきっかけで参入する店主・店員を受け入れていることが明らかとなった。また、コミュニケーションに対する姿勢や物理的・人的要因が、店主・店員をとりまく環境の全体像を構成している。そして、「横丁」の体制維持における運営主体の参入は、多様な店主・店員を束ねていく1つの手法であると評価した。



共域ゼミ

来訪者の余暇活動を支える「補助的な場」の実態と役割

—藤沢市沿岸部のサーフボードロッカーを事例として—

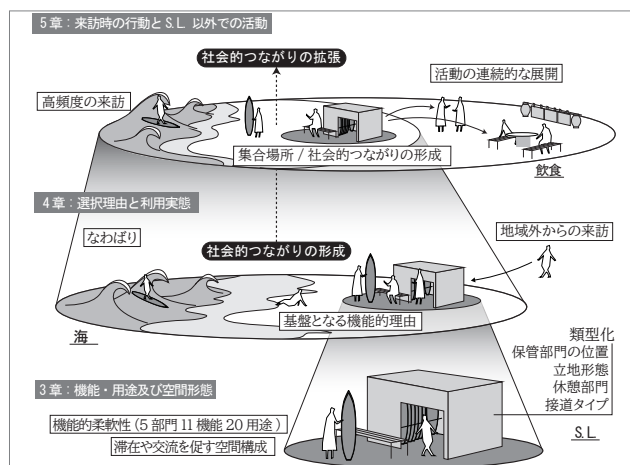
岡本峻太郎（学部卒）

研究の概要：

藤沢市沿岸部のサーフボードロッカーを対象に、来訪者の余暇活動を支える「補助的な場」の空間構成と利用実態を調査した。保管機能を超えて生じる利用者間の社会的つながりの形成や、それが地域内外の活動へどう展開するかを分析し、都市居住者の生活領域を拡張する場の役割を考察した。

結論：

ロッカーは海との動線上の休憩空間で交流を促し、利用者の利用前後の評価の変化は機能面から心理面へ変化していた。また、来訪者の集合場所や他の活動の起点としても機能し、地域内外での活動へも波及することから、都市生活における「半居住的な場」としての重要性と、コミュニティ形成への寄与を結論付けた。



共域ゼミ

特定非営利活動法人コムーネ汐留における地域運営の持続性

—構成員の当事者意識と空間への展開からみる「中小規模まちづくり」への示唆—

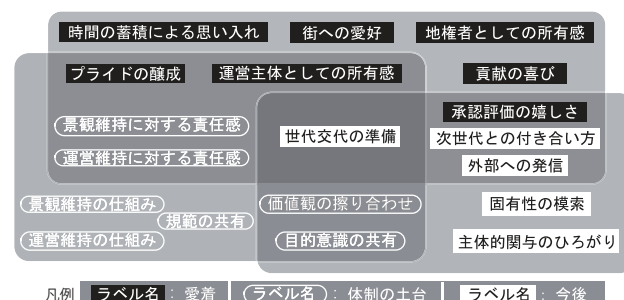
小林千香子（M1）

研究の概要：

本研究は、汐留イタリア街における特定非営利活動法人コムーネ汐留を対象に、地域運営が長期的に継続してきた要因を、組織運営の実態、構成員の当事者意識、そしてそれらが空間へ表出する過程から総合的に分析し明らかにすることを目的とする。

結論：

地域運営の持続性は、構成員の街への愛着、運営制度や仕組みへの理解といった体制の土台となる意識、今後に対する意識という三側面の当事者意識が相互に作用し、それが日常的な維持管理や景観運用として空間に可視化される循環構造にあることが明らかになった。この循環は外部からの評価や信頼を生み、主体的関与を促す点で、人と空間に近い中小規模まちづくりにおける重要な条件である。



凡例 ラベル名：愛着 (ラベル名)：体制の土台 ラベル名：今後

図 地域運営の持続を支える原動力

共域ゼミ

観光から移住への魅力享受の変容にみる観光地の持続性

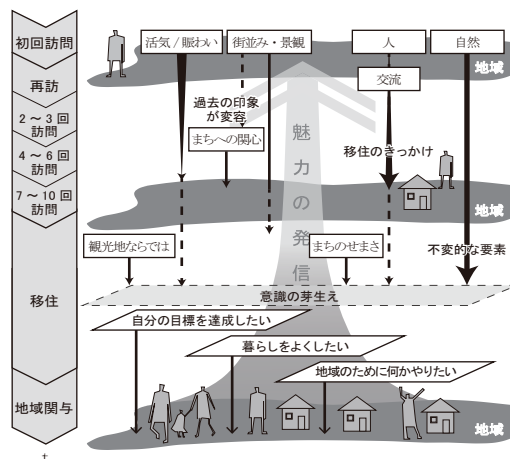
ー再活性する熱海における観光客の観光体験と移住者の地域関与プロセスに着目してー

佐藤未来乃 (M1)

共域ゼミ

研究の概要：近年再活性化が進む観光地・熱海市を対象に、観光客へのアンケート調査と移住者へのヒアリングを通じて、初回訪問から再訪を経る中で地域への魅力の捉え方が変化し、観光から移住、さらに地域関与へとつながるプロセスを明らかにした。そして、高齢化といった課題を抱える観光地において、地域の持続性を高めるうえでの移住者の重要性を考察した。

結論：再訪を重ねる中で地域への理解を深め、暮らしのリアリティへと関心を向ける観光客は、潜在的な移住予備層であることが示された。また、まちの狭さといった、熱海特有の環境が人とつながりを促し、住民同士が自然に支え合う主体的な関係を形成していた。移住者は、観光客と地域をつなぎ、魅力の享受と発信を循環させる存在として、観光地の持続性を高める新たな担い手となっている。



小笠原諸島における店主の意識が反映された店舗からみる「小笠原らしさ」

卓由真 (M1)

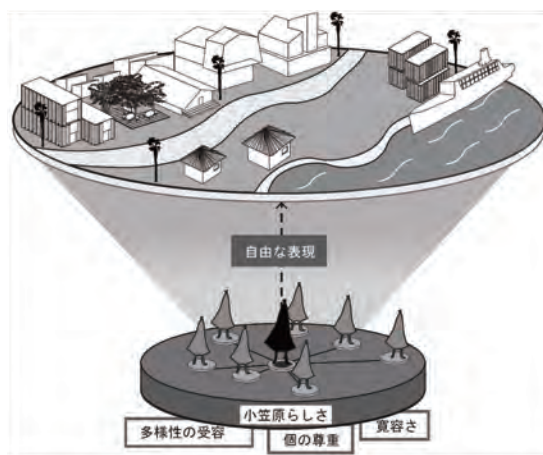
共域ゼミ

研究の概要：

時代に変遷に翻弄されてきた小笠原諸島は現在観光地として注目され、行政による景観形成が推進されている。その歴史、地理的特性がゆえに「雑然」と評される景観を「小笠原らしい景観」と捉え店舗の外観デザインに着目し、小笠原独自の景観の価値を論ずる。

結論：

店舗を営む店主の店舗外観意識に対するヒアリング調査から、店主は店舗外観のデザインの際に島の歴史・風土・経済状況などの要因から着想を得ていた。その多様な外観の背景には、その歴史の変遷によって歴史の断絶・多様な文化の流入による人々の気質への影響がある。よって、島民同士の個々の尊重・寛容性が見られ、現在のような多様な景観を呈している。このように、島民の価値観が反映されている景観こそ「小笠原らしい景観」といえよう。



日光御成街道沿いに点在する歴史資源の状態及び利用のされ方

ー住宅地開発の交通インフラと歴史資源との類型化を通じてー

中内晶太 (M2)

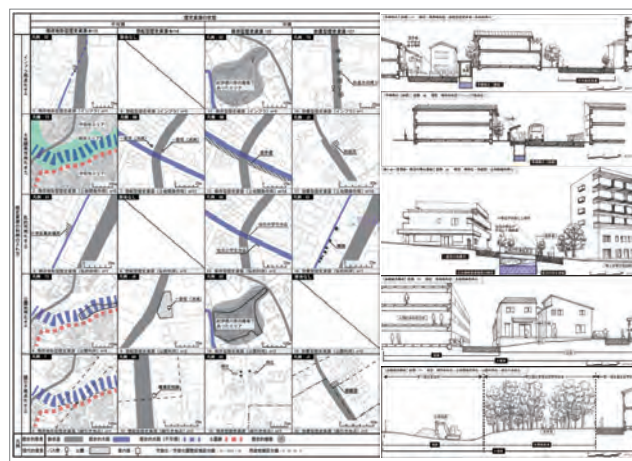
時の環境ゼミ

研究の概要：

首都圏郊外の協往還として日光御成街道に着目し、主要交通インフラと市街地の線引きが構成する日光御成街道の区間ごとの特徴と、日光御成街道沿いに点在する歴史資源の状態及び利用のされ方を明らかにした。そのうえで、一連の交通インフラの中での点在する歴史資源の位置付けを考察した。

結論：

主要交通インフラと住宅地の線引きが構成する日光御成街道の区間は6種類に分類された。また、歴史資源の計20の種類のうち、フィールドワークで17の歴史資源の類型に、計57箇所、81つの歴史資源が該当した。さらに、歴史資源の利用のされ方ごとに断面的分析を行い、歴史資源を核とした多様な利用が読み取れた。



韓国の住居文化の振興政策における新規韓屋村の真正性の獲得体系

—支援制度を拡充する行政機関と恩平韓屋村の住民との相互作用に着目して—

中谷 紗季 (M2)

研究の概要：

韓国の伝統的な家屋「韓屋」を対象とし、国が行う韓屋政策の変遷と「現代韓屋」の住居形態、またその村の住民組織の活動を明らかにした。そのうえで、国による支援制度の推進と、村の住民の住居形態への積極的な関与が体系的に獲得できるものであるかを検証し、両者の関係の在り方から村の真正性の獲得体系を考察した。

結論：

国による韓屋政策のための体系化された支援制度は、村の住民の住居形態への積極的な関与の体系化にも影響を与えていた。この村での、関与する主体の継続的な関係の構築の中で起こる国と住民の相互作用は、真正性をトップダウンの認証に留めず、関係下で構築的に獲得する体系であると評価した。



時の環境ゼミ

公園境界部の遮蔽度と利用者の滞留行動の関係

—池袋駅周辺の 29 の都市公園を対象として—

益田 暖大 (M2)

研究の概要：

公園の境界部の遮蔽度と利用者の滞留行動の関係を明らかにした。そのうえで、都市公園の多様な境界デザインが利用者の滞留場所選択と滞留行動にどのように影響を与えるかを明らかにし、利用者の活動を受容する公園の計画手法を考察した。

結論：

公園整備方針の変遷を分析することで公園の多機能化や用途の混在が進んでいる傾向が読み取れた。また、公園の境界デザインを把握し、用途地域と遮蔽度による公園の類型化を行い 8 類型が得られた。そして、利用者の滞留行動と滞留場所選択の現地調査を実施した。その結果、公園の境界部の滞留行動は公園境界部の遮蔽度や周辺の立地環境の影響を受けていることが明らかになった。



時の環境ゼミ

水防災意識社会における畳堤の管理・運用実態と住民の意識・記憶の関係

—兵庫県たつの市の 3 地区の畳堤に着目して—

赤松 陽華 (M1)

研究の概要：

水防災意識社会の再構築に向け、兵庫県たつの市の 3 地区に残る畳堤に着目し、その管理・運用実態と住民の意識・記憶の関係性を明らかにした。畳堤を媒介とした記憶が地域と行政の関係を更新するメカニズムを解明し、水防建築物が防災意識の醸成に果たす意義を考察した。

結論：

畳堤をめぐる多面的な記憶は社会的枠組みと相互作用することで集合的記憶として蓄積されていた。この記憶が行政と地域の合意形成を支えることで、畳堤は時代に応じて形を変える動的な防災装置として機能し、自助・共助・公助が融合する水防災意識社会の礎となることを提示した。



時の環境ゼミ

戦後広島における雁木の都市計画的意義

- 河岸空間の変容過程に伴う雁木の再整備と現況に着目して -

越智翔一朗 (M1)

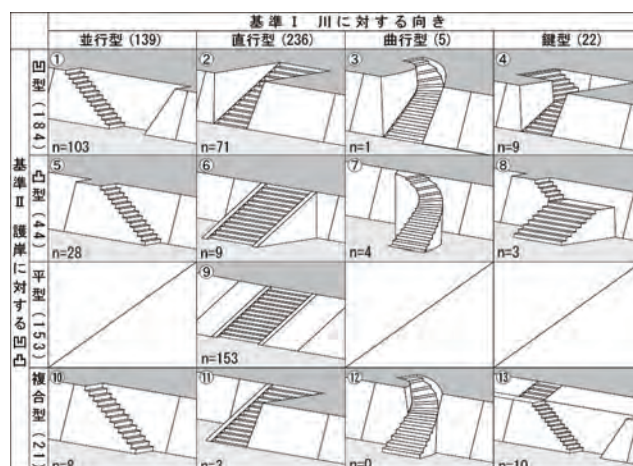
時の環境ゼミ

研究の概要：

戦後広島河川の整備に伴う〈雁木〉の変容実態と形態の特徴を明らかにした。そして雁木がいかに人びとを水辺へと誘い、回遊や滞留を促すのかを解明し、現代の都市計画における、歴史と親水をつなぐ媒体としての意義を考察した。

結論：

〈雁木〉の変容は、計画の推移に伴い【形態の多様化】【動線の分節化】【文化的素材の利用】の三傾向として現れていた。都市計画的意義は、歴史的価値を担う【遺構雁木】と、人びとを水辺へと誘う【親水誘導雁木】の二系統に整理された。そして、河岸緑地において市民の活動を支え、平和空間の質を向上させる【親水誘導雁木】の重要性を提唱した。



群島の地域圏の捉え方および形成過程にみる流動性

- 島根県隠岐諸島の島前・島後を対象として -

早川澤 (M1)

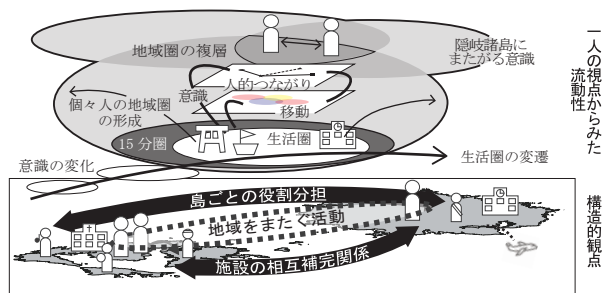
時の環境ゼミ

研究の概要：

島根県隠岐諸島における地域圏を捉え、流動性の特質を明らかにした。島民へのヒアリングおよびオーラルヒストリー調査を通じて、生活圏、移動の範囲、人的つながりの実態と島同士の関係性を把握し、地域圏およびその形成過程を明らかにし、流動性を考察した。

結論：

隠岐諸島において、意識を基盤とした人的つながりによる生活圏の決定や移動と人的つながりにまたがる活動等により、生活圏と移動、人的つながりが相互関係を構成し、地域圏を形成する。以上より、流動性は、個々人の生活圏の変遷と島の構造的条件の双方の観点からみられ、群島という地理的条件が、地域の固有性を形成する一因となっていることを示した。



住民の風景観とメディアに表象された風景観の作用

- 和歌山県雑賀崎地区における「万葉」から「日本のアマルフィ」への呼称変化に着目して -

藪内洸希 (学部卒)

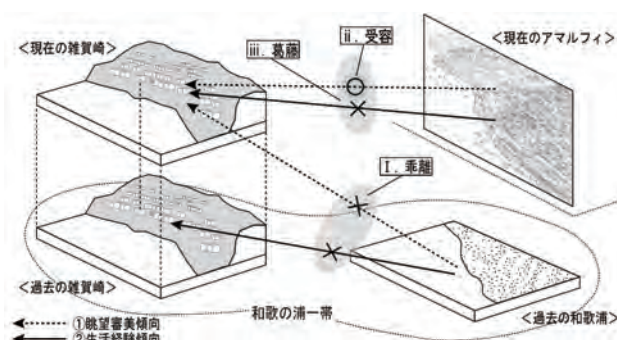
時の環境ゼミ

研究の概要：

雑賀崎地区を対象に、景観要素と評価からなる住民の風景観を明らかにし、2つの傾向を見出した。そして、「万葉」と「日本のアマルフィ」という異なるメディア表象が住民の風景観に及ぼす作用を明らかにし、風景観の傾向と絡めた作用の構造を考察した。

結論：

住民の風景観には【眺望審美傾向】【生活経験傾向】の2つが見られた。万葉の風景観はいずれとも接続せず認識が希薄化していた。日本のアマルフィの風景観は【眺望審美傾向】とは視覚的類似性により接続し受容され、【生活経験傾向】とはスケールの差異により接続せず葛藤を生じた。この二重の作用構造を踏まえ、可視化されにくい価値を可視化し、両風景観を接続させる重要性を提唱した。



1994年 4月 ~ 2026年 1月

37

過去の卒業論文テーマ

1994年 4月 ～ 2026年 1月

全域 匿名イベント下で生じる社会関係とその日常化 山室福也 2021年
 23区 滞留者を除外するDefensive Architectureとその不可視化の原理 大和英理加 2021年
 台東区 「クラフト的ものづくり産業」を下支えする《創造的産業空間》の持続的形成メカニズム 森田彰香 2021年
 中央区 脅威を克服するレジリエントな文化遺産の実現を可能とする社会・経済活動と構造 梶谷菜々美 2022年
 目黒区 住民と専門家の境界領域に在る「ローカリスト」の沿線開発への参画とその課題 上原拓輝 2023年
 全域 東京都のフィットネスクラブの利用者の振る舞いとマナージャーの運営にみるフィットネスの多様化 宮地航太郎 2024年
 杉並区高円寺 個人店舗集積地での回遊に伴う店舗内を含む沿線体験 佐野翔哉 2024年
 豊島区 公園の境界部の近接性と利用者の滞留行動の関係 益田匠大 2024年
 武蔵野市 新規参入の店主・店員が構築するハモニカ横丁のコミュニケーションの実態 森映介 2024年
 荒川区日暮里 専門知の開放が進みつつある専門店街にみる「創造連鎖」 藤原静乃 2025年
 23区 路面電車における車外の知覚が促す沿線への想起と連想 松村翼牙 2025年
 港区 特定非営利活動法人コムーネ汐留における地域運営の持続性 小林千香子 2025年

<海外>
 ■ベトナム ハノイ市 環境問題を抱える公共空間におけるベトナム人の利用実態に関する研究 菅沼結城子 2010年
 ■中国 上海市 上海市における日本人街の形成・成熟過程に関する研究 西原宗一郎 2012年
 ■韓国 恩平区 韓国の住居文化の振興政策における新規韓屋村の真正性の獲得体系 中谷紗季 2024年

<対象地を限定していない論文>
 ストック/フローの視点からみたくまちづくりの評価 岡田敬克・宮入聖子 1994年
 盆地における閉鎖性と中心性に関する研究 藤原隆也 1995年
 TV・CMで描かれる風景に関する研究 麻生哲朗 1995年
 怪人二十面相シリーズに現れる都市風景像 鈴木敦子 1995年
 シークエンス景観の価値構造に関する研究 西藤大真 1996年
 ホームページにおける田舎生活者の情報発信に見る生活の指向性について 堀理一郎 1999年
 漫画に描かれる都市モデル像の研究 高松 2004年
 都市農村交流の継続からみた地域の受け入れ方法に関する研究 川見亮介 2007年
 インターネット産直を運営する農園の現状と課題に関する研究 岩橋恭平 2009年
 「まちづくり漫画」構築プロセスに向けた内容構成と視覚的要素の分析 山田周 2012年
 都市における学習場所としてのサードプレイスの研究 遠藤聡太 2013年
 扱われた歴とその継承 岡井ひなの 2013年
 都市におけるストリートダンサーの空間利用の自在性 車戸高介 2014年
 東京大都市圏における人口定常状態にある郊外住宅地の変容 竹下佑 2015年
 巨大建造物が都市に定着する過程における社会評価の変遷についての研究 福田雄太 2015年
 アニメ聖地巡礼を基盤としたまちおこしに関する研究 松平怜也 2015年
 近代化産業遺産の集約的保存における「認定外遺産集約」の位置付けと価値 林延政 2016年
 脱成長期の東京大都市圏における都市構造の変容に関する研究 福井亮介 2017年
 駅を中心とした超高層開発により生じる住環境の変化と課題に関する研究 松田 はるか 2017年
 新築分譲マンション併設型コミュニティカフェにおける開設プロセスが運営実態に与える影響に関する研究 村本孝之 2018年
 就労・居住の流動化を試みる実践者のライフヒストリーと空間的・時間的工夫 金子祐那 2018年
 副業や趣味活動に関わった場としてのレンタルスペースの空間構造と社会的役割 松浦遥 2018年
 複数文化圏を生きた次世代移民が再価値化する都市空間の特性に関する研究 加藤公花 2019年
 地域開放に向けた高齢者居住の空間構成と事業者の介入態度による居住者への活動影響 吉野良祐 2019年
 再都市化過程における神社の空間変容と開発圧力の構造 泉川時 2019年
 都市における「ひとり行動」の社会的意義とその成立要因 原望峰 2019年
 旅行者によって意味づけられる風景と旅のシークエンス 田村祐太郎 2020年
 在宅時間増大に伴う共同生活の再編 高橋亮太 2020年
 退職高齢者の人付き合いの衰退と相談相手との出会いの時期・場に関する研究 富永万由 2020年
 「居心地の良い場所」において交わされる非言語コミュニケーションに関する研究 三村彩夏 2020年
 ストリートバスケットにみる都市空間の自在性とその条件 飯塚宙 2021年
 都市の壁面に展開される「応援広告」の実態と形成背景 池上恵美 2022年
 場所を介した「わたしごと」の拡張とその形成過程 糸賀大介 2022年
 変容する日常で生きた風景 岡田開 2022年
 オンライン・オフラインにまたがる振る舞いのトポロジーと潜在的繋がりの可視化 高柳綾香 2022年
 公共的空間におけるひとり占め体験の実態に関する研究 林泰地 2022年
 喫煙者の志向性に応じた喫煙空間の発見プロセス 福本史織 2022年
 都市に展開されるインフォーマルな創造活動の場に関する研究 横山魁彦 2022年
 建築物の「一貫性」を獲得するためのサイン計画と建築構造の関係 今村美葉 2023年
 都市の公共空間における若年軽度精神障害者のストレスの様相 大友裕也 2023年
 民間企業で行われる奉還活動にみる「コモンズ」の表れ 岡本晴佳 2023年
 地域への「構築き」と広域の関係性を志向するコーヒースタックにみる「部分と全体」の応答に関する研究 西村味佳 2023年
 20世紀末以降の「都市風」にみる江戸・東京表現の変遷 海老澤理々華 2024年
 物理空間・情報空間を横断するストリートスポーツにみる都市の「遊具化」と「舞台化」 永田一真 2024年
 ミニシアターを取り巻く「語り場」における当事者意識の醸成 松島沙音 2024年
 リミナルスペースにみる都市空間に対する「不気味さ」「懐かしさ」の喚起 朝倉健人 2025年







3

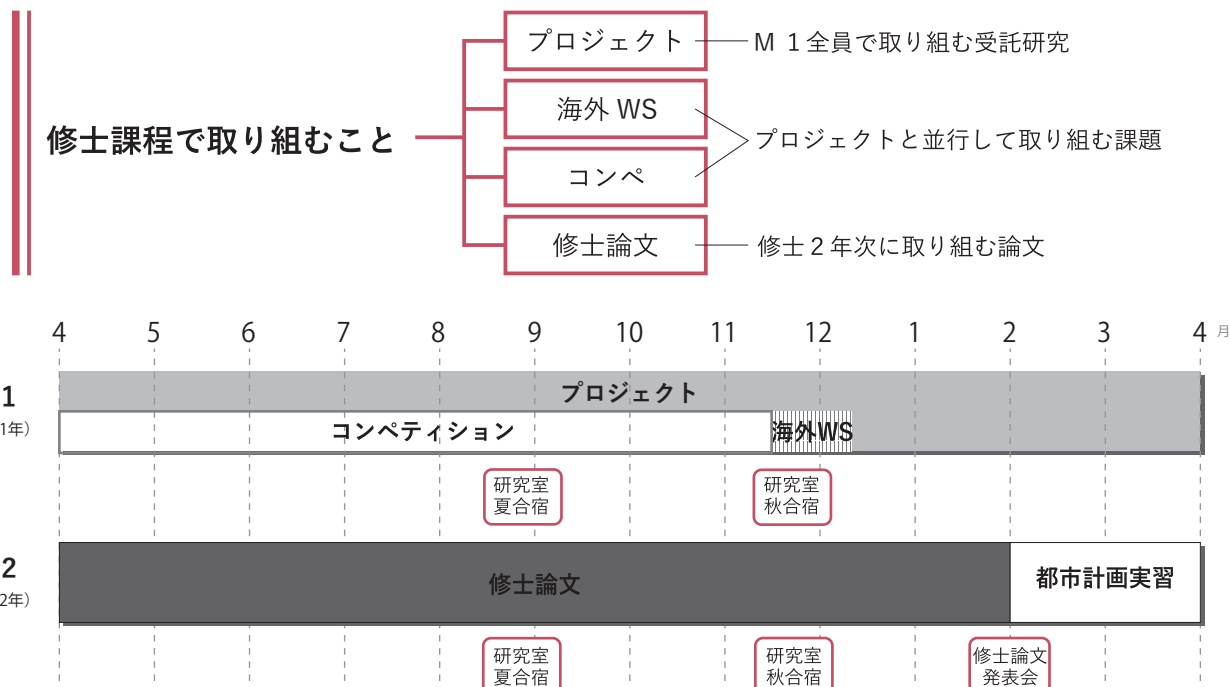
【修士の2年間】

修士課程の活動とプロジェクト

- ・修士課程の2年間
- ・Double Degree Program
- ・海外ワークショップ
- ・コンペティション
- ・就職状況
- ・プロジェクト

修士課程の2年間

後藤研で修士への進学を考えている学生は、基本として以下のようなプログラムスケジュールをたどります。修士一年目はプロジェクトを中心に海外WSやコンペに参加します。また、修士の二年目はゼミの先輩として後輩の論文指導にあたりながら修士論文を進めます。



Double Degree Program

後藤研究室ではDouble Degree Program(DDP)への参加を応援しています。DDPとは、早稲田大学と台湾大学間での交換留学制度であり、各大学で一本ずつ修士論文を提出することによって、両大学の修士のDipolmaをもらう事が可能です。後藤研究室からは、過去に3名のプログラム参加者を輩出しました。また、台湾大学からもこれまでに5名の学生が1年間、日本で一緒にプロジェクト活動やゼミ活動と一緒に活動をしてきました。

台湾大学 DDP の魅力 執筆：加藤（19 期）

建築・都市計画を学ぶ上で、留学先として台湾を選ぶことに疑問を持つ人も多いかと思います。しかし私は台湾への留学を通して、日本人が台湾へ留学することは大きな意味があると感じました。ここでは私が感じた台湾DDP留学の魅力をご紹介します。

1) 台湾を通して、日本の近現代を見つめ直すことができる

台湾には、日本統治時代（1895-1945年）に日本政府によって計画された建築・都市基盤が数多く残されており、台湾の初期の近代化は日本を介して始まりました。このように、歴史的に日本と繋がり深い台湾で建築・都市計画を学ぶことで、近現代の日本や今自分が置かれている環境を見つめ直すことができました。

2) フィールド調査と人の生の声を重要視したデザインアプローチ

授業では台湾の都市をフィールドとした演習課題が与えられます。フィールドへでて、現地調査・聞き取り調査をもとに居住者や利用者が潜在的に求める空間をデザインします。台湾でのフィールドワークは、台湾と日本の文化・建築・都市の違いに驚かされることばかりでした。



▲台湾大学のシンボルである中央図書館



▲フィールド調査の様子

海外ワークショップ

シドニーワークショップ概要

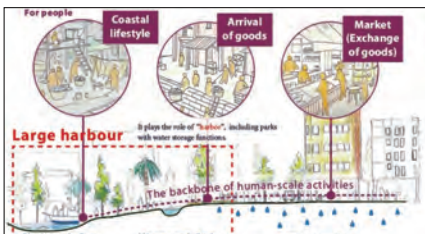
例年、11~12月ごろに、およそ一週間かけて行われる、ニューサウスウェールズ大学、シドニー大学、早稲田大学後藤春彦研究室によるワークショップです。今年度はニューサウスウェールズ大学で実施しました。現地の学生と混合チームを組み、まちづくりの提案を行います。

2025年度の敷地であるBlackwattle Bayでは、フィッシュマーケットの建て替えに伴い、大規模再開発計画が構想されています。しかしシドニー市は、湾岸環境の悪化や歴史・文化的文脈の喪失、住宅建設によるウォーターフロントの公共性低下などに対する懸念を示しており、単なる住宅供給にとどまらない都市デザインのあり方が求められています。ワークショップ前半は各チームで綿密なフィールド調査や文献調査を行い、後半は英語でのプレゼンテーションに挑戦し、発表のデザインも含めて多くの学びを得ることができます。



各チームの提案とワークショップの様子

Group1: The Buffer Valley

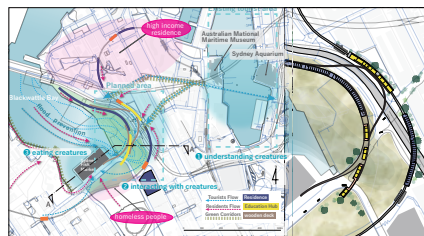
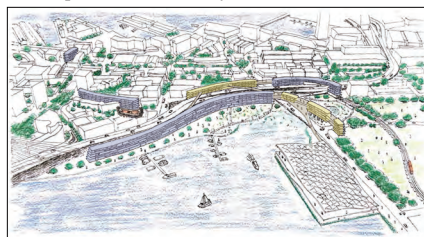


Group2: Living with Nature

and Flexible Production



Group3: Balanced City



コンペティション

第19回 長谷工 住まいのデザインコンペティション 佳作「染めな染み - 生業がつなく家族のかたち」



就職状況

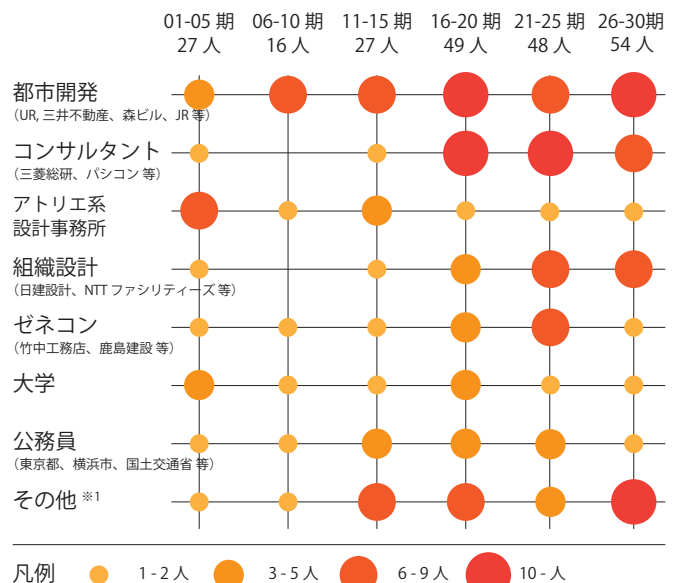
後藤春彦研究室の卒業後の就職先について右図にまとめました※2。卒論と同様に多種多様な業種に就く人が多く、その他など建築分野に捉われない就職先が目立ちます。

一貫して都市開発に携わる人が多いのが特徴です。個々の特徴を述べると、1-5期にかけては卒業して10年以上経っており、独立して自分の事務所を立ち上げる人が目立ちます。近年にかけては、コンサルタントやその他が増加している傾向が見られます。また、大学の教員も多く、研究生活も充実しています。

後藤研究室の就職先はUR都市機構、森ビル、日建設計、竹中工務店、鹿島建設、東京都庁、三井不動産などがあります。他にも、博報堂やGoldmanSachs、三菱総合研究所などの建築以外の企業にも在籍していたり、全日空パイロット、農家、イタリアンシェフなど幅広い業種に就職しています。

※1 その他：広告、NPO、印刷、IT、メーカーなど

※2 有効回答数 222/311 2026年1月時の本人の申告に基づく



プロジェクト

後藤研究室では、受託した研究等をM1が全員で取り組むことになっており、共同研究を通じて都市計画に関する技術、知識の伝授、学習を図っています。ワークショップ等を取っ掛かりに、M1を中心とするメンバーが地域に入り込んで風を吹き込むとともに、昼夜を問わない体力で地域の人たちにエネルギーを与えています。プロでもなく素人でもない学生ならではのニュートラルな立場を生かしながら、地元の役場や地域団体等と協力して計画・協定などの策定を行っています。

また、まちづくりの計画だけでなく建築計画も行っています。過去には、兵庫県城崎町で実施設計をしており、他にも駅舎の改修・温泉施設の設計・コミュニティ施設の計画といった実績があります。まちづくりを進めていく中で、建築設計にまで話が進むことがあることが、研究室の一つの特徴であるともいえます。

※年間で同時に何本かの共同研究が動いています。チームに分かれたり、全員で取り組んだりします。

※各プロジェクトはDr以上がリーダーとして付きます。時には先生自ら指揮を取ることもあります。



Project 紹介1 UR賃貸住宅におけるWell-beingの実現に向けた施策のあり方に関する研究

UR共同

団地外観が周辺住民のwell-beingにもたらす影響の研究

前年度は、UR賃貸住宅におけるWell-being指標の検討と、その指標向上に資する施策の可能性整理を主眼としてプロジェクトを進めた。それに対し、本年度は、指標の検討段階から一歩踏み込み、団地外観に着目した調査・分析に重点を置いて取り組んだ。関東圏を中心とした複数のUR団地を対象に現地視察および景観調査を行い、団地外観が居住者のみならず周辺住民のWell-beingにどのように影響し得るのかを検討した。

keywords: UR団地、UR賃貸住宅、Well-being指標、地域医療福祉拠点化

プロジェクト概要

UR都市機構では、少子高齢化社会への対応、国による地域包括ケアシステムの構築に資するため、平成26年度より団地を地域の資源として活用し、多様な世代が生き生きと暮らし続けられる住まい・まちを目指した地域医療福祉拠点化の取組に着手しており、地域関係者との連携体制の構築、医療福祉施設等の充実の推進、多様な世代に対応した居住環境の整備推進、多世代におけるミクスコミュニティの形成の推進を図っているところである。地域医療福祉拠点化の取組については居住者や外部有識者等からも一定の評価を得ているものの、今後少子高齢化の加速が予想される中、選ばれるUR賃貸住宅であり続けるためには更なるくらしの価値提供が必要であり、また、次世代につながる新たな住まいの価値を追求するに当たって、居住者や地域関係者のWell-beingの向上の視点が重要である。

こうした課題意識を踏まえ、本研究では、UR賃貸住宅を取り巻く居住環境や団地と地域との関係性に着目し、今後のUR団地における住まい・まちづくりの検討に資する視点や示唆を導き出すことを目指す。



今年度の主な活動・調査

・ 団地視察

団地外観視察



◀コンフォール松原



◀左近山団地

住棟見学



◀左近山団地



◀ヌーヴェル赤羽台

その他・交流施設見学



◀左近山アトリエ（左近山）



◀左近山団地付近の公園

これまでに訪れた団地

1 赤羽台団地



2 左近山団地



3 花畑団地



4 吉川団地



5 豊四季団地



6 コンフォール松原



7 洋光台北団地



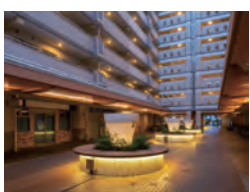
8 洋光台中央団地



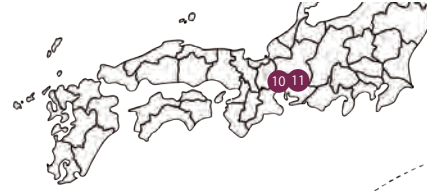
9 公田町団地



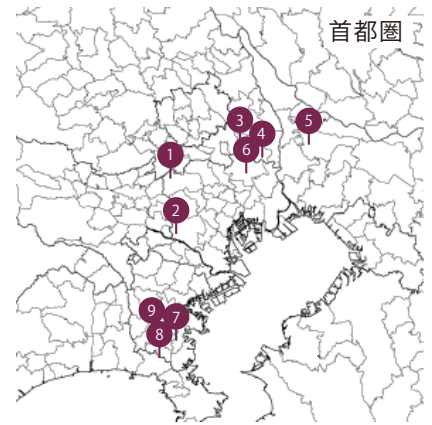
10 豊成団地



11 千代が丘団地



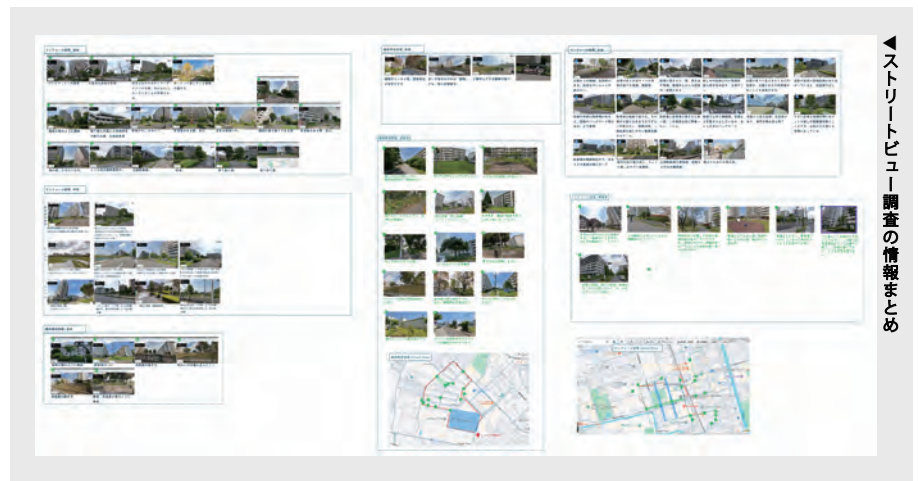
全国



・団地外観カタログの作成

ストリートビュー調査

本研究では、団地調査に先立ち、ストリートビューを用いた事前調査を行っている。現地調査のみでは敷地内部の視点に偏りやすいため、事前に団地周縁部や接道部の見え方、施設の視認性などを確認し、着眼点を整理した上で現地調査に臨んだ。これにより、外部視点からの仮説を現地で検証・補完する調査が可能となっている。



▲ストリートビュー調査の情報まとめ

カタログの型作成

団地外観を比較・分析するため、団地外観カタログの基本フォーマットを作成した。配置図・外観写真・説明文を共通構成で整理し、外観を構成する要素の重なりから抽出したデザインパターンを図面上にプロットする形式とし、外観と配置の関係性を視覚的に把握可能な整理手法を構築した。



▲現在進行中のカタログの型

POLUS マネジメント プロジェクト

2024 年度より、早稲田大学後藤研は「都市計画と農村計画を一元的に進める広域圏計画実践への民間企業参画の可能性」を探るべく、自主研究を始めました。広域圏計画の新たな担い手候補として、複数市町村を商圏として活動する地域密着型の中小規模の建設業を位置づけており、埼玉県の数自治体を商圏として住宅開発を行うPOLUSと協働しています。

keyword: 農村計画、広域圏計画、公共サービス、新たな担い手、地域未来牽引企業、まちづくりマネジメント

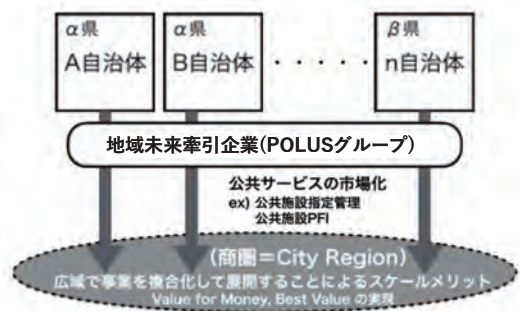
プロジェクト概要

社会構造の変化を受けて、日本は従来の都市計画に加えて農村計画を実践していく必要に迫られています。都市計画とは違い、農村計画には行政の範囲を超えた広域圏でのサービス提供が求められます。しかしその計画主体や単位、ガバナンスなどは未だ模索の段階です。

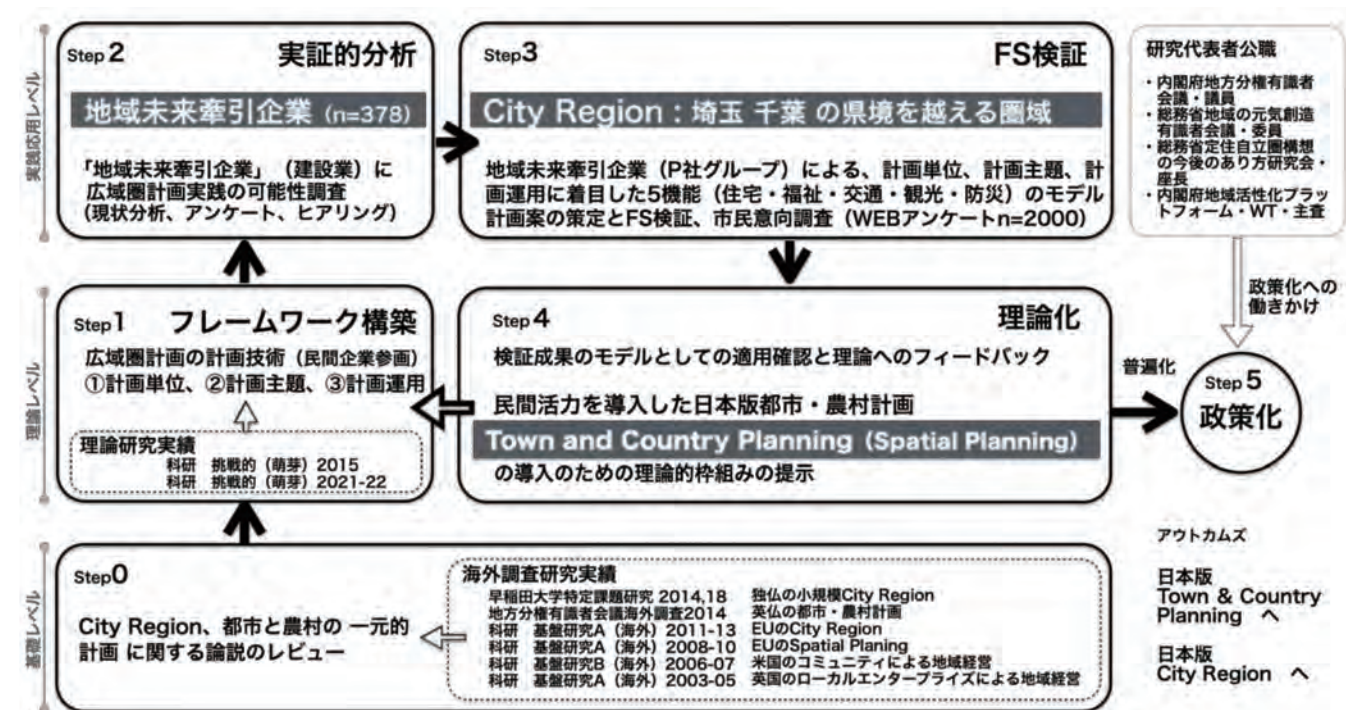
そこで本研究は、都市計画と農村計画を一元的に進める広域圏計画実践の新たな担い手として、複数の自治体と協働する民間企業を想定します。そして、自治体と協働可能な民間企業の候補として、複数市町村を商圏として活動する地域密着型の中小規模の建設業を位置づけます。このため、研究に際しては埼玉県の地域未来牽引企業であるPOLUSとの協働を行います。

これを前提に、1) 民間企業の特性を活かした広域圏計画の ①「計画単位」②「計画主題」③「計画ガバナンス」に着目した計画技術のフレームワーク構築、2) そのフィジビリティの全国レベルにおける確認、および 3) 具体的なケーススタディ・エリアにおいてのモデル広域圏計画案の策定を行うことで、民間企業の参画による事業実施の可能性と採算性を前述の計画技術のフレームワークに照らして検証します。

最終的に4) 普遍的な理論へフィードバックし、5) 政策提言を行います。社会構造の変化を受けて建設業が業態の変更を模索する中で、旧来のゼネコンの下請けや孫請けであった地元の「土建」業から、複数の自治体と協働した「まちづくりマネジメント」業への転換が期待できる地域政策的な研究課題を示すとともに、本研究はわが国の空間計画における新たな時代を画する学術的独自性と創造性を兼ね備えています。



▲広域圏計画のイメージ



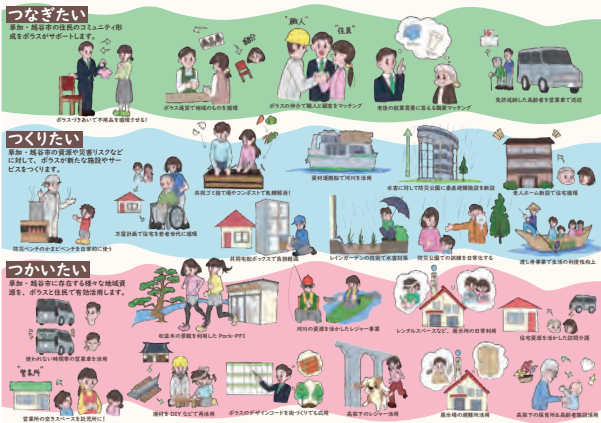
▲研究の目的およびプロセス

今年度の主な活動・調査

■行政ヒアリングやアンケート調査を踏まえた、POLUSへの広域圏事業計画の提案

今年度は、前年度に整理した民間企業による「公共的サービス」の分析を踏まえ、POLUSを対象として、埼玉県越谷市・草加市をフィールドに、両市を一体的に捉えた実践的な計画提案へと研究を発展させました。

POLUSおよび行政へのヒアリングを通して、事業特性や実装可能性の観点から計画内容を精査し、最終的に住宅・福祉・観光・防災・文化の5つをメインテーマとして設定しました。各テーマについて、計画単位、計画主題、運用の方法、POLUS・住民・地域それぞれにとってのメリットおよび将来的なビジョンを整理し、提案として取りまとめました。あわせて、市民意向を把握するためWebアンケート調査（n=X）を実施しました。



▲ POLUSへの中間発表で提案した26案

04 防災

4-1 POLUS レインガーデン認証

水害の多いエリアにおいて、戸建住宅のレインガーデンの実装を推進し、レインガーデンのPOLUS式認証制度の確立。コンテスト開催等の啓発活動。

STEP1 戸建住宅のレインガーデン事例の調査
STEP2 レインガーデンのPOLUS式認証制度の確立

水害の多いエリアにおいて、戸建住宅のレインガーデンの実装を推進し、レインガーデンのPOLUS式認証制度の確立。コンテスト開催等の啓発活動。

STEP1 戸建住宅のレインガーデン事例の調査
STEP2 レインガーデンのPOLUS式認証制度の確立

4-2 遠くじゃない、上に逃げよう防災公園

緑地帯には多くの公園が水深3mの低地帯にありながら指定緊急避難場所となっており、避難経路の重要性が高まっている。そこで、Park PFIを活用し、POLUSが公園に避難経路を確保・活用しながら公園の利活用を両立させることで、防災性と日常的な暮らしの両方を両立させる。

STEP1 公園の防災意識・危機管理意識の向上
STEP2 公園の防災機能の強化

4-3 防災公園の日常利用

公園は日常的に使われることで、地域に馴染みやすい場所になる。ラジオ体操や外遊び、散歩、ランニング活動などを進め、人が集い、つながる場としての活用をめざす。

STEP1 公園の防災意識・危機管理意識の向上
STEP2 公園の防災機能の強化

4-4 平時は展示場、有事は避難所

展示場を形成する際の一時避難施設としての活用に加え、災害時に必要な物資や設備の確保・管理も行政から委託し、POLUSが担う。

STEP1 公園の防災意識・危機管理意識の向上
STEP2 公園の防災機能の強化

▲ 作成したテーマごとのプレゼン資料（防災テーマの一例）

Step 1 WS・コンテストによる知名度向上（0～2年目）

Step 2 新規・既存分譲住宅での実装（3～5年目）

Step 3 付帯制度の導入・補給・草加市内へ展開（5～10年目）

Step 1 WS・コンテストによる知名度向上

Step 2 新規・既存分譲住宅での実装

Step 3 付帯制度の導入・補給・草加市内へ展開

▲ 中長期計画や事業スキームなど

■「そうかりノベーションまちづくり」の視察

草加市が株式会社とリノベーションと連携し、空き店舗の活用を通して地域の魅力を再生する取組です。視察では、行政ヒアリングの後、まちの家守会社や関連拠点を巡り、最後にミノリテラス草加を訪れました。本取組は、補助金に頼らない民間主導・小規模な展開により、店舗同士の連携や共助を生み、地域内での経済循環を育てています。



■埼玉県庁都市整備部まちづくり局長へのヒアリング

26件の事業提案を行い、今後に向けた示唆を得ました。デジタル活用や歴史資源への着目が少ない点が課題として挙げられ、ポラスづくりや職業マッチングへのアプリ活用、古民家や廃材の活用と結びつける可能性が示されました。一方、既存資源の活用を見直す提案は評価され、河川活用事業には実現可能性があるとの指摘を受けました。



▲「そうかりノベーションまちづくり」の視察

Project 紹介 3 POLUSグループ×早稲田大学

既成住宅地における相互編集型まちづくり（Interknitted Town）の実践に関する研究

日本の郊外のエッジ部分の価値を再考し、自然・農・住まいが融合した住宅地像として、生産緑地と住宅が入り混ざった「Garden City 型住宅地」をはじめとする、いくつかの「次世代住宅地モデル」を開発することを目的とする。この共同研究はNEDOによる交付を受けた共同研究（2020-23年度）の延長で、Interknitted Townをビジョンとしてまとめていく実践的なフェーズの研究に位置づけられる。



〈Inter-knitted Town〉とは

Inter-knitted 編み方

「住民と開発者」や「既存のまちと新しい開発」が相互関係を築きながらまちを変えていく。クラフトや手仕事のように皆が関わり相互に編集することが、柔軟な対応を可能にする。

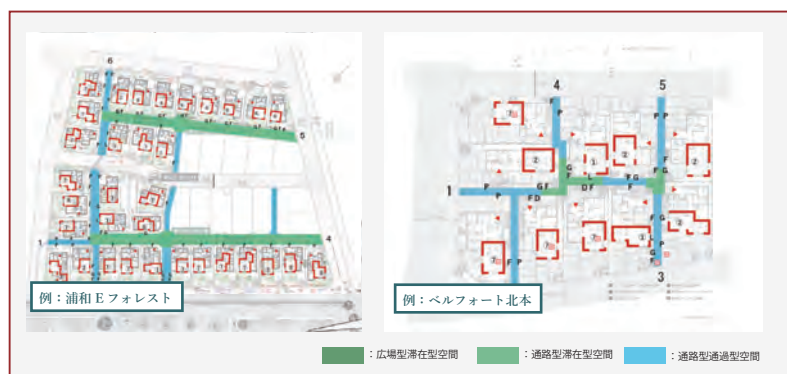
Town 編む範囲

顔が見えて、主体性を発揮できる中学校区程度の範囲を単位とする。

今年度の主な活動・調査

1 POLUSグループが手がける分譲地の特徴でもあるコモンスペースを形状や用途に応じて分類し、分析 コモンスペースのタイポロジー

分譲地におけるコモンスペースは、共用・共助・コミュニティ形成といった多様な活動を育む可能性をもつ。そこで、その可能性を具体的に捉えるための第一歩として、コモンスペースの理解を深めることを目的にタイポロジー分析を行った。現地視察や図面のレビューから、形状や住宅との配置関係を定量的に整理するとともに、そこで生じ得る活動の可能性について考察した。



2 POLUSグループの分譲地づくりの型と理念から、分譲地の新たな可能性を探る 「かた」とおこし絵図を用いたワークショップの実践

「かた」は2024年までにPOLUSグループが受賞したグッドデザイン章から抽出した要素技術に、デザインの効果や理念的意味を付与したものである。また、おこし絵図は誰もが気軽に参加できる、住宅とその外部空間を検討できる2.5次元ツールとしての活用が期待される。

「かた」に含まれるデザインの型とその効果を、おこし絵図を導入した図面にマッピングすることで、分譲地の空間が持つ新たな可能性を探る事を目指している。



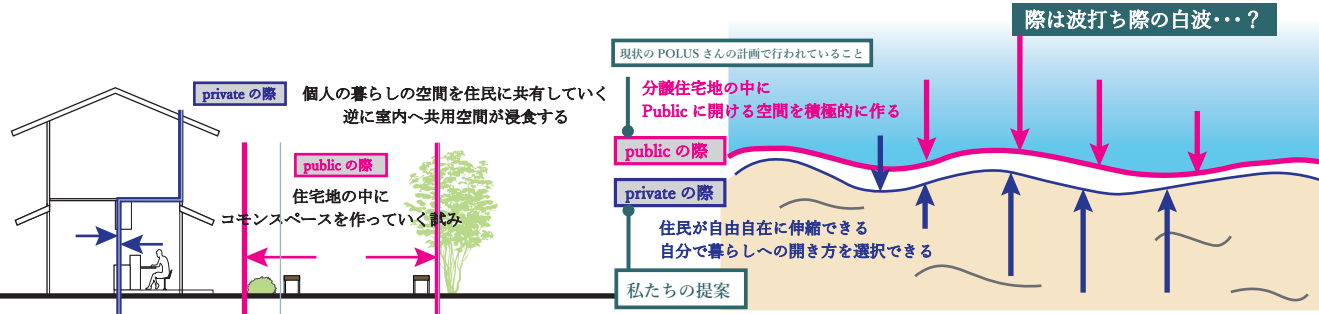
▲ワークショップで用いる「かた」



▲マッピングの様子

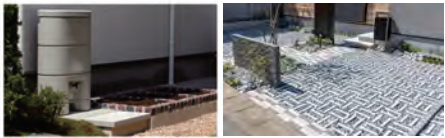
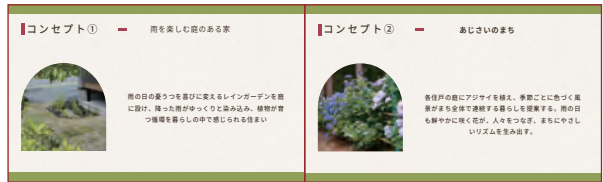
3 POLUSグループの分譲地に見られるプライベートとパブリックの境の空間から着想を得た 「際」の空間の可能性の検討

コモンスペースのタイポロジー分析を通じて見出した緩衝空間を「際」と名づけ、その可能性について考察している。際は、明確に境界が立ち上がる「閾」とは異なり、グラデーションを帯びた連続的で緩やかな空間である。本研究では、分譲地に見られる際空間を手がかりに、その潜在的な価値を検討するとともに、都市スケールへの応用可能性についても思考している。



4 治水と親水を両立する 分譲地におけるレインガーデン活用の提案

近年深刻化する水害を背景に、分譲地が治水・親水の役割を担うことへの期待が高まっている。そこで本プロジェクトでは、レインガーデン等による貯水がもたらす治水・親水効果を整理し、それらを分譲地計画にどのように組み込めるのかを、実際の事業化を見据えて検討している。



▲雨水タンクとレインパーキング





4

【卒論生募集要項】

- ・ 卒論生募集スケジュール
- ・ 研究室入室プロセス
- ・ ホームページに関して
- ・ 質問/相談窓口 連絡先

卒論生募集スケジュール

1 月

22

都市計画系合同説明会

23

後藤先生との個人面談

オープンルーム

24

- ①1月22日(木曜) 12:30~15:00【事前予約】
- ②1月27日(火曜) 16:30~18:00【事前予約】
- ③1月28日(水曜) 10:30~15:00【事前予約】
- ④1月29日(木曜) 10:30~15:00【事前予約】

- 1月22日(木曜) 12:00~18:00
- 1月27日(火曜) 12:00~18:00
- 1月28日(水曜) 10:00~15:00
- 1月29日(木曜) 10:00~15:00

25

希望者はhgoto@waseda.jpで予約をしてください！

研究室にてオープンルームを行います。

場所：後藤春彦研究室（55号館N棟 7F09室）

現在の所属メンバーに質問したり、話を聞くことができます。

予約不要なので、気軽にお立ち寄りください！

26

場所：後藤春彦研究室（55号館N棟 7F09室）

27

28

スタートアップレクチャー

※仮配属申請中の者は、原則参加必須

29

- ①1月26日(月曜) リムさん 14:30-16:00
- ②1月26日(月曜) 泉川さん 16:30-18:00
- ③1月28日(水曜) 林さん 16:00-17:30

30

場所：55号館N棟2F建築大会議室

研究室にて「都市計画とは何か」について、様々な視点からレクチャーを行います。学部四年から専門分野に入る前に、都市計画について知識を深める会です。

31

※開催方法は基本的に対面のみ

詳細については改めてご連絡させていただきます。

2 月

1

2

都市計画系関連イベント

都市計画系修士論文発表

2026年2月2日(月) 9:30~20:00(予定) 修論発表①

2026年2月3日(火) 9:30~17:10(予定) 修論発表②

場所：52号館102教室

本年度の修士論文発表会が行われます。

お気軽に参加して下さい。

4

5

6

7

選考面接

8

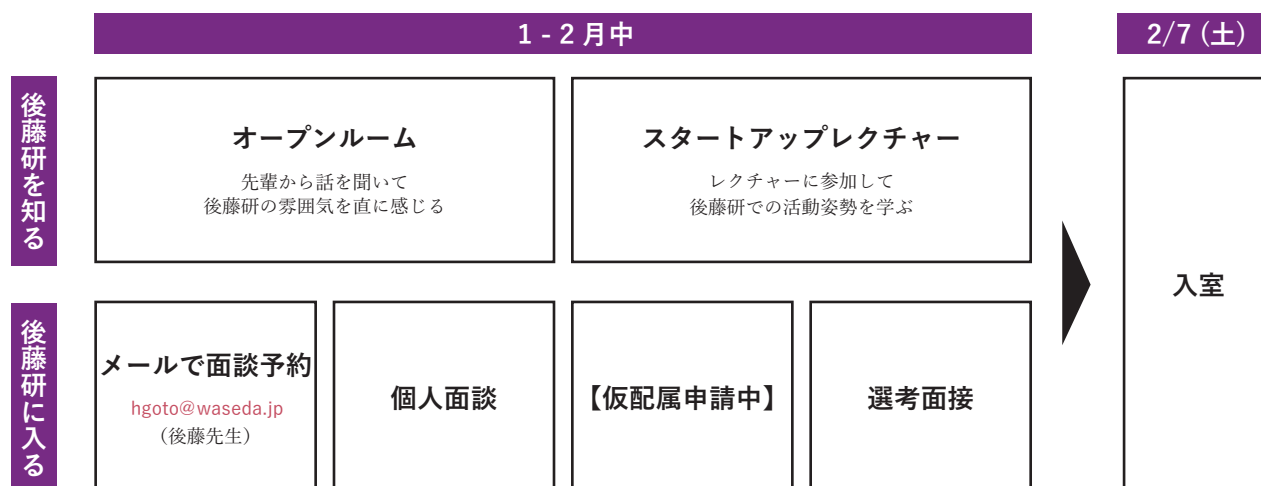
2月7日(土曜) 午後 最終面接(要予約)

場所：対象の方には後日詳細をご連絡いたします。

その後新歓コンパも予定しておりますので、ぜひご参加ください。

9

研究室入室プロセス



※卒論生として後藤研究室へ入室を希望する者は、必ず「個人面談」を受けてください。
個人面談で【仮配属申請中】【保留】【未定】に振り分けます。
さらに、【仮配属申請中】の者を対象とする「選考面接」を経て、【配属決定】とします。

ホームページに関して

研究室 HP にて情報を提供しています。
(<http://www.goto.arch.waseda.ac.jp/>)

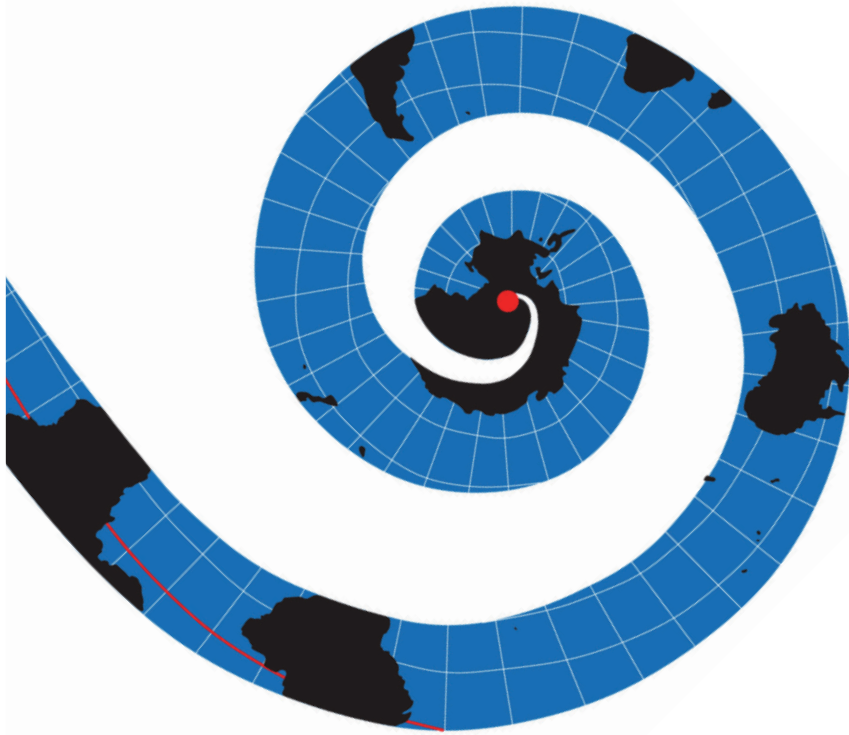


質問・相談窓口 連絡先

M1 松島 (shiomelody@fuji.waseda.jp)

質問等あればお気軽にご連絡ください！

MEMO



GOTO SCHOOL RECRUIT